



TITLE:

人文 第65号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第65号. 人文 2018, 65: 1-51

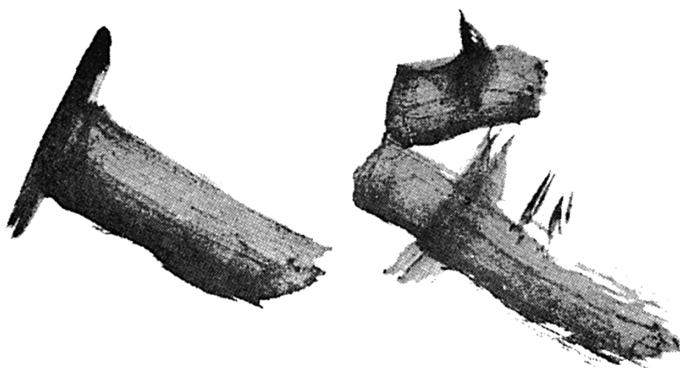
ISSUE DATE:

2018-06-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/232846>

RIGHT:



第 六 五 号



2018

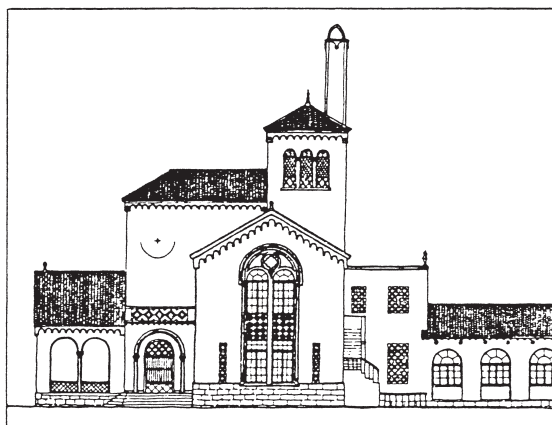
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第六五号

2017年4月—2018年3月

も く じ



随想

いせのーさかなや、です

井波 陵一

講演

夏期公開講座 名作再読Ⅱ

虚構原則への誘い―寺山修司『あゝ、荒野』を読む

藤井 俊之

歌舞伎役者一代記―初世中村仲蔵『月雪花寝物語』を読む

永田 知之

古都奈良・京都の発見―岡倉天心『日本美術史』を読む

高木 博志

彙報

共同研究の話題

私たちはどう生き(残)るか? 転形期と人文学

佐藤 淳二

龍門研究の継承・更新・発信

稲本 泰生

メランコリー

岡田 暁生

所のうち・そと

固焼煎餅ヲ柔ラカク咀嚼スルノ論

池田さなえ

スッポンにひそむ「小さいおじさん」

中西 竜也

移民と農業、アメリカと日本

徳永 悠

「科学の人、孫文」のその後

森川 裕貴

書いたもの一覧

いせのー さかなや、です

井 波 陵 一

京都大学の北部構内から少し離れた閑静な住宅街にあるため、ついつい見落とされてしまうのか、大学のキャンパスマップに載せてもらえないことすらあった北白川の人文研は、各構内の建物とは異なり、日々の暮らしを感じさせる声や音にすっぱり包まれていた。登下校する小学生の話し声、配達員の呼び声、洗濯機の回る音、古紙回収や宣伝カーの決まり文句、さらには小学校の夏休み開始直後の十日間、研究所の前庭を使って行われる町内のラジオ体操の掛け声……すっかりお馴染みだが、だからこそ特に関心を惹くわけでもない耳慣れた響きの中で、一つだけ、いつも聞き入ってしまうものがあつた。毎朝ではなかったかも知れないが、定期的に三重県からトラックでやって来る魚屋さんがご近所に呼びかける声である。

「まいどー ありがとう、ございます。いせのー さかなや、です」

漢字を使うと、「毎度ありがとうございます。伊勢の魚屋です」となって、何のおもしろみもなく、別にどうと言うことは



ないが、この売り声のポイントは、普通の文章に直すとこぼれ落ちてしまう二つの長音にほかならない。「まいどー」、「いせのー」と、「オ」の音を伸ばしながら、あたかもジェットコースターがゆるゆると勾配を上って行く雰囲気を出す。そして頂点に達したところで、今度は一気に下るように、小気味よく……でもどこかもっさりとした感じも残して、「ありがとう、ございます」、「さかなや、です」と締めくくる。「トタトタタ、トタトタタ」、「トタトタ、トン」といったリズムだろうか。その間合いと言うか起伏と言うか、緩急のつけ方がじつに見事で聞き飽きることがなかった。声そのものにも、どこか呑気と言うか、とぼけたところがあって、まさしく「ノリがいい」のである。

八〇年代の助手の頃から親しみ、九〇年代半ばに助教授として戻って来てからも楽しみにしていたこの売り声に、意外な一面を見出したのは、王国維の『宋元戯曲考』を訳していた際に、次のような引用文に出くわしたからである。

「仁宗皇帝が亡くなられたので、国中が音曲を停止した。その結果、市井にはじめて果物売りのパフォーマンスが現れた。（中略）都では何か物を売る際に必ず独特の調子をつけた売り声が発せられ、その節回しは様々だった。だから街中の人々はその声の調子を取り入れ、詩歌や文章を交えてパフォーマンスの音楽としたのである」。

巷の売り声の一つの芸として取り入れること自体は、特に珍



しい現象ではないだろう。しかし、自分が実際に親しんだ売り声にも、そうした可能性があるのだと改めて気づかされて、ちよつとワクワクしたのは確かである。

そこからさらに、新たなジャンルの誕生と発展に際して惜しみなく発揮される猥雑なエネルギーを共有するものとして、『水滸伝』に見える芝居小屋の口上と、メデイシンショーのことを歌ったアメリカン・ロックミュージックの歌詞を重ね合わせ、クソ度胸を発揮して、人文研の開所記念講演会で具体的に両者を紹介しながら熱弁をふるったのは、たしか一九九六年のことだったと思う。山本有造さんから、「イナミ節だね」とかわれたことを覚えている。

『宋元戯曲考』を訳している時、つねに頭の中で響いていたのはアメリカン・ロックミュージックだった。文献に残された宋元時代の楽器の音色や曲調の音階を具体的に知ることは望むべくもないが、だからこそかえって、ボブ・ディランやニール・ヤングのハモニカ、エリック・クラプトンやロビー・ロバートソンのギターの音を、また、レヴォン・ヘルムやリチャード・マニユエルの声までも勝手にかぶせながら想像を逞しくした。

現在に残る中国の伝統音楽を学んだわけでもないし、ロックミュージックからさらに本格的にブルースにまで遡ったわけでもない。したがって、「どこにその根拠がありますか？」と絶えず問い質され、それに答えることができてはじめて相手にし



てもらえる「実証的研究」なるものの、ちゃんとした入口に立っていったとは到底言い難く、たんなる「勝手な思い込み」にすぎないと言われれば、まさしくその通りである。

しかし、十一世紀の中国の大道芸人と二十世紀の伊勢の魚屋さんは、たしかに通りで隣り合っていたと、やはり信じたい。日々の暮らしが生み出す声が、はるかな過去を生き生きと蘇らせる契機となったという意味で。

いつの頃からか、その魚屋さんの声を聞くこともなくなった。あの声を懐かしむ人も、いま、ご近所にどれほど残っているのか……。



講演



夏期公開講座

名作再読——いま読んだらこんなに面白い11

虚構原則への誘い

——寺山修司『あゝ、荒野』を読む

藤井俊之

「恐らくきみたちの死でさえも、それは鑑賞に耐えるべき一つの虚像のドラマとされ、「きみ自身の死」を死ぬことは出来なくなってしまうているのだ。」

右の一節は寺山修二が友人であり彼自身ファンでもあったファイティング原田へ宛てた手紙の一節である

（『遊撃とその誇り』）。この言葉には、自分もまたメディアの虚構空間の中でフィクショナルな現実を生きた寺山からボクサーへの同志としての励ましを読み取れる。中井英夫に見出された短歌を出発点として、演劇、ラジオ、テレビ、映画、そして『家出のすすめ』、『書を捨てよ、町へ出よう』で知られる批評に至るジャンル横断的な活動において、その全てに成功を収めた彼が、生前に唯一残した長編小説『あゝ、荒野』には、連載の開始された前年の東京オリンピックの余韻を残す新宿歌舞伎町の雑踏が、文字の世界にまでその喧騒をひびかせている。

寺山の作品中、おそらくはそのジャンルの特異性ゆえにあまり語られることのないこの小説は、しかし、彼の経歴を見渡した際には一つの重要な転換点に位置していることがわかる。というのも、寺山の活動の前半、短歌の時期を締め括る最後の単独歌集『田園に死す』の出版されるのが一九六五年、そして後半、演劇の世界へ本格的に足を踏み入れる端緒となる劇団「天井桟敷」の旗揚げは一九六七年であり、ここに『あゝ、荒野』の出版年を加えるなら、それが一九六六年であり、ちょうど短歌と演劇の狭間にあると言えるからだ。このことが重視されるのは、小説の二人の主人公、ともに無宿者でボクサーとして人生の再出発を図るバ

リカン建二と新宿新次という二人の若者が、寺山の二つの資質をそれぞれ一つずつ分けもつ者として現れることを理由とする。吃りの〈バリカン〉はモノローグを抜け出せない寺山の短歌的側面を、そして、他者との出会いのうちに自己を鍛え上げる新次はタイアローグ的な演劇的側面をあらわしている。つまり、『あゝ、荒野』は、これ以前と以後の寺山の文筆活動を正確にトレースした自己言及的な作品として読み解ける。実際、小説の最後、二人が試合で対決するシーンでは、〈バリカン〉が新次にめった打ちにされて死亡する。これを、短歌から演劇への移行期にあった寺山による葛藤の証言として読むことは可能だろう。

その構造をおよそ以上のようにまとめることができるこの小説が、しかし、寺山の一人語りに終わるものでないことは（もしそうであれば、彼は結局モノローグの世界にとどまったことになるだろう）、そこに多様な引用が織り交ぜられているところから見取れる。その引用は、ジョイスやジュネといった文学に範囲を限るものではなく、軍歌（「父よ、あなたは強かった」）や週刊誌（アサヒ芸能）からの抜粋、当時のコマーシャル（キャベジンやヴィックス）の謳い文句にいたる雑多なものであり、また、寺山の他の著作を読めば気づかれるように、小説中には彼が街で見聞きし

た実在の人々の言動が登場人物たちのそれとして随所に引用されている。

ほぼ全ページにわたって見出されるこうした引用の技法に照らしてみれば、寺山の〈本心〉を最終的に勝利する新宿新次に仮託することもできなくなる。登場人物の言動はすべて現実の街頭の出来事のコラージュから成立しているのであり、そこに作者の実像を特定することはできない。むしろ小説の喧騒のうちに現れてくるのは、すべてが記号化され、全体の内部に位置付けられてしまう「代理人 (stand-in)」の世界（冒頭の引用に見出されるファイティング原田のいる世界）の中で「おれの時代」（村田英雄「柔道一代」の歌詞のもじり）を掴もうとする登場人物たちそれぞれの格闘であり、その意味において、作者のその都度の「即興描写」も最終的な予定調和の回避を意図したものと理解される。寺山の述べるところでは、小説の執筆にあたって「最初からわかっていたものは何一つとしてなかった」、つまり、この世界に原初のアイデアは存在しない。

フィクションを現実の代用品にするのでもなく、また、現実をかつて存在した起源の反復にするのでもない、そうではなく、虚実の間を繰り返し往還することによって「もう一つの世界」を見出そうとする寺山の創作方

法に、綱領となる彼自身の言葉を当てはめるなら、「虚構原則」という言葉がふさわしい（「顔なしわらべ唄」）。フロイトの「現実原則」を反転させたこの造語によって寺山が意図していたのは、第一に自己の虚構性（その成立の事後性）を自覚することであり、また、そのようにしてこそ、「本当の私」といったナルシシズムの呪縛からひとと抜け出すことができるということであった。現実には虚構であり、しかし、虚構はそれとして現実の効果をもつことを見据えた上で、両者の交錯をいまとは別の可能性の現れへとどのように導くことができるのかを考え続けた寺山にとって、『あゝ、荒野』は自己解体からのはじまりの書であったと言えるのではないだろうか。

歌舞伎役者一代記

——初世中村仲蔵『月雪花寝物語』を読む

永田知之

初世中村仲蔵（一七三六―一七九〇）といえば、十八世紀後半の江戸歌舞伎界を代表する名優の一人と目される。今その名が知られているとして、それは概ね落語・講談を通してのことだろう。だが、ここではそれらの創作ではなく、彼が人生を振り返った自著『月雪花寝物語』（以下『寝物語』）を取り上げたい。

江戸深川の生まれで実の両親も不確かな仲蔵（幼名万蔵）は、四歳（以下、全て数え年）で長唄と舞踊を生業とする夫婦の養子となる。養父母は彼に愛情を注いだ。だが、生きる術として芸事を教える際は、容赦がなかった。即ち「不器用で覚えが悪くて、なんでも尻へぬける」度にクジラのひげで作られた棒と「光る小刀」を出して、彼の「足の腿をまくってしっぺいであて」「尻をまくりてき」ったなどと『寝物語』に描かれる幼少期を経て、養父母の人脈からか、中村座（江戸の著名な劇場の一つ）の座元（劇場主）、後の八世

中村勘三郎に師事して、七歳で役者の道に入り、中村中藏（後に仲藏）を名乗る。

この後、修行に励みながら、友達との市中における狼藉、仲間内での男色などの記述が続く。十六歳で役者を辞めて酒屋を開くが、やがて結婚した直後に養父母を喪い、妻と共に踊りの稽古所を始めた。だが結局は、十九歳で役者に復帰する。

復帰後に下級役者の仲間から「楽屋なぶりもの」とされる辛さに耐えかねて、身投げを試みるが、常々文武の稽古（水練も含む）を積んでいたため、命を拾う。能楽の師に「堪忍」の二字はその体「根本」なり、父母が授けた体は己一人のものではない、と諭されて修行に努める。ただ、この後も人の着物を勝手に質に入れる、博打の罪で捕縛される、詐欺に遭うなど、成長は緩やかであった。だが、ともかく二十九歳の頃、名題（一人前とされる役者の階級）に昇進する。

三十一歳の折、市村座で上演された『忠臣蔵』で、当時は山賊めいた端役の斧定九郎を割り当てられる。落胆した仲藏だったが、妻岸に励まされて発奮し、工夫を凝らす。神頼みの帰途に出会った浪人（または貧乏旗本）の風体に見えて、定九郎を白塗りの不良武士として造型し、初日の舞台に登場した。静まり返る客席にしくじったと思いつつ、精一杯の演技を見せる。

実は観客は仲藏の凄みに圧倒されて、声を上げられなかったのだ。かくて役者としての出世街道が開かれる——これが落語・講談「中村仲藏」の粗筋である。

著名な逸話だが、仲藏自身の『寝物語』での言及は、次の一文に尽きる。「私、明和二乙「三丙の誤り」戌年九月節句より「上方へ帰る」尾上菊五郎名残狂言にて「忠臣蔵」仕り、初て小野「斧」定九郎役勤申候」。他の著作でも、この成功が後に大星由良之助（『忠臣蔵』の主人公）役への抜擢につながったとしか述べていない。

仲藏の定九郎が大評判を取って、今も演出が踏襲されていることは疑い得ない。だが成功に対する、彼自身の筆致は甚だそつけない。大看板の四世市川團十郎に認められて、役者の血筋を持たない仲藏が異数の出世を遂げる事情は、他の資料も参照して初めて明確になる。これは、『寝物語』が出世譚として書かれていないことを示唆する。

「役者は武道にひとしく名を以て誠となすなり。しかれば、死の跡「後」の名こそ惜しけれ。利口にケ様に存候が、我が心別り不申候「分からない」。当年五十歳にて、その元の心知れず、もとより世も善し悪し多くしてさとり難し。心一ぱい仕り見可申候なり」。『寝物語』が単なる自慢話でないことは、誠こそ肝要

だが、自分は何も分かっていない、努力するのみ、というこの仲蔵の言葉からも窺える。かかる自己省察こそ、千両役者にまでなった成功者の思い出話でありながら、納まり返った芸談に終わらなかった原因であろう。

さて「仲蔵」のまま出世した彼にも、改名の経験がある。実は、養父の名「中山小十郎」を襲う経緯の詳細から説き起こし、来し方を回想し、團十郎から孫を喪つても舞台を勤めた話を聞き、自らも息子を亡くしながら興行を休まなかったことを思い返して涙を流す出来事をもって『寝物語』の主要部は終わる。役者が長唄の名跡を継ぐ異例の事態は、養育の恩に報いることを動機とする。『寝物語』現行本の構成が仲蔵の意に出るならば、それは報恩譚かつ出自の定かでない自身に確かな位置を与える試みとして書かれたと思われる。しかし師の勘三郎没後に傾いた中村座の復興に努めていた仲蔵は、不入りを恐れた周囲の勧めで早々と名を元に戻す。それは仲蔵の名が、彼の一存では捨てられないほど、既に大きくなっていたことを示す。『寝物語』脱稿の五年後、五十五歳で現役のまま仲蔵は没した。

芸道論の性格も持つにせよ、ざつくばらんな回顧談という側面が『寝物語』には色濃い。冒頭近くの次の

一段を見ると、そう読むことこそが、仲蔵自身の意にも適うように思われる。

「人もうしやうごとに、「今の苦勞はを早、昔語りにしたいものじや」と申候。我も数度申候。友にそだし咄はなし友も去りぬれば、今は昔がたりも相手もなし。なれども語りても見て、つれづれの友は硯、きれ筆「毛のすりきれた筆」を咄し友と引き寄せて、「どんな目に逢ひなされた。サアこの紙に書きなんせ」。咄せばさまたま憂き艱難、嬉しい事もありのまま、善し悪し嫌わぬ心の掃除、隅から隅まではき出して、昔語りを書き散らし、筆は「を」心の友となし、昔を書かて笑う門、染め分けの振袖でここ「養父母」の内へと来たとサ」。

〔『寝物語』の引用は森銑三・鈴木棠三・朝倉治彦編、服部幸雄解題『日本庶民生活史料集成 第十五巻 都市風俗』三一書房、一九七一年に拠った）

古都奈良・京都の発見

——岡倉天心「日本美術史」を読む

高木博志

今日、古都奈良や京都をめぐる観光言説や歴史顕彰の起点になるものとして、岡倉天心の「日本美術史」がある。初代東京美術学校校長就任とともに、岡倉天心が一八九〇年から同校でおこなった講義である。

たとえば、江戸時代の観光ガイドや地誌類では、京都の東寺では伽藍の西側の大師堂（図版）が弘法大師信仰の中心として重視されていたのに対し、現代では東側の九世紀の唐風美術を代表する講堂の立体曼荼羅に焦点が移っている。象に乗る端正な帝釈天像は、密教美術の粹である。古都奈良の興福寺の江戸時代の信仰が、西国三十三ヶ所観音霊場の札所の南円堂であったのに対して、現代は美しい阿修羅像に代表される天平美術へと変化することも同様である。すなわち寺院は、宗教から美術的価値へと場の意味を転換した。それは一九九三年から始まる、JR東海「そうだ、京都いこう。」の京都イメージの世界にもつながる。



とうじ

1658年『京童』の大師堂

さらに古都京都の女性性も、「日本美術史」の国風文化（延喜時代）に起原する。今日、洛外でありながらもつとも「京都らしい」宇治は、世界遺産・文化的景観・歴史的町並みと重層指定されている。江戸時代の宇治は、宇治川の先陣争いなど軍記物の男性的な戦いの場であったのが、一八九〇年代以降、国風文化の鳳凰堂、源氏物語の優美な貴族の女性性などと、ジェンダーが一八〇度転換してゆく。

もう一つは、「奈良は東洋のギリシャ」と見立てることの、国民国家日本にとっての意味である。一八八八年六月五日のフェノロサの講演、「奈良ノ諸君ニ告グ」が始まりで、「日本開明ノ遠因、即チ文明東漸ノ

原因ハ希臘ノ歴山帝ガ東征シテ文明ノ種子ヲ印度ニ遺シタルニ起リ（中略）亜細亞仏教的美術ハ此奈良ニ於テ完全セリ」と表明された。

一九世紀のレオポルト・フォン・ランケの世界史像では、ヨーロッパの諸国の文明や歴史の起原はすべてギリシャ・ローマから世界へと波及すると見る。したがって大英博物館のエルギン・マーブル、ルーブル美術館のミロのヴィーナスは、レガリア中のレガリアとなった。ベルリン美術館に残るシラーとゲーテの像は、ローマ風衣装をまとい古典古代への憧れを示す。

ランケ史学を日本に移入した京都帝国大学坂口昂は、『プラトーのアカデミ』（『世界史論講』岩波書店、一九三一年、小山哲氏の指摘）において、西欧は「各自の文化の伝来が深く所謂古典希臘に負ふ所多大なるにも想到して報反感の念を起さざるを得なかつた」と、ロマン主義の役割を論じた。

かくして一八八九年には東京・京都・奈良に三帝国博物館の設置が決まり、帝国博物館はヨーロッパの博物館を参照しつつ組織を整えていった。「美術」の制度化は、フェノロサの欧米からの美術理論の移入にはじまった。一八八七年に東京美術学校が設立され、帝国博物館初代総長の九鬼隆一や岡倉天心が中心となつて、臨時全国宝物調査（一八八八年―一八九七年）に

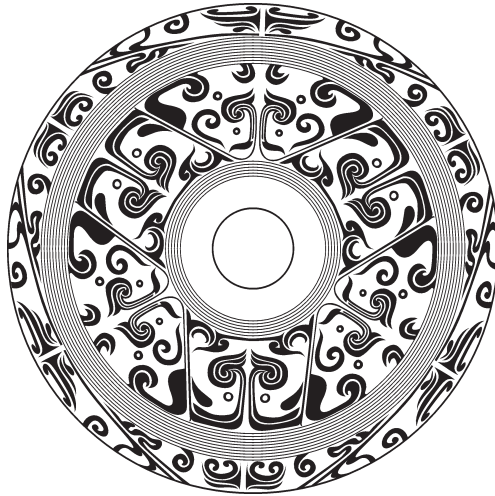
おいて、二一万点にのぼる文化財についてジャンル・等級・年代・作者などを確定した。今日の「美術史」の基本的な枠組みをつくりだすに至った。

岡倉天心は、「日本美術史」の講義の中で、今日でいうところの推古時代（飛鳥文化）―天智時代（白鳳文化）―天平時代―空海時代（弘仁・貞観文化）―延喜時代（国風文化）―鎌倉時代といった時代区分を提唱した（一八九一年度、『岡倉天心全集』四）。

古都奈良に関わつては、法隆寺釈迦三尊像に代表される中国六朝文化の影響をうけた推古時代（飛鳥文化）、法隆寺金堂壁画にインド・ギリシャ風美術をみる天智時代、国際色豊かな盛唐文化の影響をうけた東大寺戒壇院四天王像や正倉院のガラス工芸などを標準作とする天平時代、といった歴史認識を示した。古都京都の平安時代は、平安遷都（七九四年）後の前半は密教の空海時代、後半は「純然たる日本風」で優美な貴族文化が栄え、絵師金岡、仏師定朝といった芸術家を輩出した延喜時代（国風文化）にわけられる。この一〇世紀以降の延喜時代（国風文化）が、ナショナル・アイデンティティとなり、かつ京都イメージとなつてゆく。そして日清戦争後の一八九七年、ナショナルリズムの勃興期に、最初の文化財保護法である古社寺保存法が制定され、国宝（National treasure）概念がはじめ

て成立した。

このように古代から近代までの時代区分は、歴史学に先んじて、美術史においてまず成立した。それは、国際社会の外交の場や博覧会において、視覚に訴える美術の影響力が大きかったためである。実際、「日本美術史」がはじめて活字の書物となるのが、パリ万国博覧会に向けて編纂された *Histoire de L'art du Japon*, 1900 であった。それは日本語ではなくフランス語による自画像である。



彙報 (二〇一七年四月より二〇一八年三月まで)

おくりもの

- 。田中雅一教授は第十二回日本文化人類学会賞を受賞(二〇一七年五月二十八日)。
- 。石井美保准教授は第十四回日本学術振興会賞を受賞(二〇一八年二月七日)。
- 。石井美保准教授は第十回京都大学たちばな賞(優秀女性研究者賞)を受賞(二〇一八年三月二日)。

人のうごき

- 。岡村秀典教授(東方学研究所)を附属東アジア人文情報学研究センター長に併任(四月一日〜二〇一八年三月三十一日)。
- 。石川禎浩教授(東方学研究所)を附属現代中国研究センター長に併任(四月一日〜二〇一八年三月三十一日)。
- 。岩井茂樹教授は国際高等教育院の併任を解除、当研究所(東方学研究所)に配置換(四月一日付)。

- 。籠谷直人教授は大学院地球環境学堂の併任を解除、当研究所(人文学研究所)に配置換(四月一日付)。
- 。佐藤淳二は、大学院地球環境学学教授に採用の上、当研究所(人文学研究所)を併任(四月一日付)。
- 。岩城卓二准教授は、教授(人文学研究所)に昇任(四月一日付)。
- 。古松崇志は、准教授(東方学研究所)に採用(四月一日付)。
- 。向井佑介は、准教授(東方学研究所)に採用(四月一日付)。
- 。井狩彌介は、客員教授(文化研究創成研究部門、四月一日〜二〇一八年三月三十一日)。
- 。JACQUET, Benoit Marcel Maurice フランス国立極東学院京都支部長は、客員准教授(文化研究創成研究部門、四月一日〜二〇一八年三月三十一日)。
- 。藤本幸夫は、特任教授(四月一日〜二〇一八年三月三十一日)。
- 。VITA, Silvio 京都外国語大学教授は、

特任教授(四月一日〜二〇一八年三月三十一日)。

。小野容照助教(人文学研究所)は、辞任(九月三十日付)、九州大学大学院人文科学研究所准教授に就任。

。井波陵一教授(東方学研究所)は、定年により退職(二〇一八年三月三十一日付)。

海外での研究活動

。小川佐和子助教(人文学研究所)は、二〇一六年七月二十四日成田発、ウィーン大学他において、十九世紀後半から一九三〇年代にかけての映画・演劇をめぐる日欧比較研究を行い、二〇一七年四月六日帰国。

。藤原辰史准教授(人文学研究所)は、二〇一七年十一月二十七日大阪発、ハイデルベルク大学において冬学期集中講義「Food and Agriculture in modern Japan」を担当し、ルーヴェン大学において演題「人類の歴史を変えた鉄の馬?」を講演し、ヤギエヴォ大学において日本の食文化に関する講演を行い、二〇一八年二月九日帰国。

。小川佐和子助教（人文学研究部）は、

二〇一八年一月二四日大阪発、オーストリア国立図書館他において、十九世紀後半から第二次世界大戦にかけてのドイツ語圏における大衆喜歌劇の研究を行い、二〇一八年二月二七日帰国。

。森本淳生准教授（人文学研究部）は、ジョン万プログラム研究者派遣により二〇一七年十月一日成田発、ニューヨーク大学フランス文学科において、訪問研究員としてジョン万プログラム課題「レチフ・ド・ラ・ブルトンヌと文学的モデルニテの生成」に関する研究を行い、二〇一八年三月三一日帰国。

招へい研究員

。巫 仁恕 中央研究員近代史研究所研究員

十九世紀後半中国の地域的消費と社会
變遷：同治期四川省巴県を中心に

（文化生成研究客員部門）

受入教員 村上准教授
期間 二〇一七年二月一日～

。ZHANG, Qiong ウェイクフォレスト
二〇一七年四月三十日

大学准教授

明末清初の天文気象学

（文化生成研究客員部門）

受入教員 武田教授

期間 五月十五日～八月十四日

。ZWIGENBERG, Ran ペンシルベニア州立大学アジア研究専攻准教授

精神医学と原爆

（文化連関研究客員部門）

受入教員 田中教授

期間 四月五日～八月二十日

。PERSMANN, Otto フランス国立社会科学高等研究院主任研究員

法学的認識論の弱さが法律体系にもたらす影響の比較研究

（文化生成研究客員部門）

受入教員 立木准教授

期間 八月八日～二〇一八年二月七日

。金 培懿 国立台湾師範大学文学部教授

近代日本における経学史研究の展開と中国への影響

（文化連関研究客員部門）

受入教員 古勝准教授

期間 九月一日～

二〇一八年二月二八日

。卞 東波 南京大学文学院教授

唐宋詩日本古注本研究

（文化生成研究客員部門）

受入教員 永田准教授

期間 二〇一八年二月一日～

四月三十日

招へい外国人学者

。周 佳 浙江大学古籍研究所講師

宋代官銜制度研究―墓誌史料からの考察を中心に

受入教員 宮宅准教授

期間 二〇一六年八月一日～

二〇一七年八月二日

。趙 晟佑 ソウル国立大学助教

東アジア仏教にみえる末法思想の比較研究

受入教員 宮宅准教授

期間 二〇一六年八月一日～

二〇一七年八月二日

。張 利軍 東北師範大学歴史文化学院

副教授

夏商周国家構造の考古学研究

受入教員 岡村教授

期間 二〇一六年九月二十日～

二〇一七年九月十九日

。張 忠煒 中国人民大学歴史系副教授
秦漢時代の法律認識―経学・讖緯・術
数からみた―

受入教員 宮宅准教授
期間 二〇一六年十月一日～
二〇一七年九月三十日

。都 賢喆 延世大学校文科大学史学科
教授

高麗末における明・日本との詩文交流
の意義

受入教員 矢木教授
期間 二〇一七年三月十六日～
二〇一八年二月二十八日

。蔡 丹君 中国人民大学文学院古代文
学教研室講師

『陶淵明集』の日本における抄刻と流伝

受入教員 永田准教授
期間 四月二十六日～六月十八日

。VERDON, Noemie ナーランダー大
学講師

中世北インドの宗教・文化史、特に十
一世紀の著作家

受入教員 稲葉教授

期間 七月十日～七月二十二日

。許 文堂 中央研究院近代史研究所副
研究員

吉田書簡からみた中華民国と日本の断
交危機

受入教員 村上准教授
期間 七月十八日～八月十八日

。彭 劍 華中師範大学中国近代史研究
所副教授

清末制憲問題の研究

受入教員 石川教授
期間 八月三十一日～
二〇一八年八月三十日

。李 琬美 弘益大学校師範大学教育学
科教授

日本近代進歩主義教育

受入教員 藤原准教授
期間 九月四日～
二〇一八年三月三十一日

。朱 騰 中国人民大学法学院副教授
出土文献と秦漢時代の制度史

受入教員 宮宅准教授
期間 九月十五日～
二〇一八年九月十四日

。楊 孝鴻 上海财经大学人文学院副教
授

授

漢代画像石（磚）の調査と研究

受入教員 岡村教授

期間 九月二十日～
二〇一八年九月十九日

。陳 奉林 北京師範大学歴史学院教授
東洋外交史

受入教員 石川教授
期間 十月十日～二〇一八年一月一日

。張 瑋琦 国立清華大学准教授

環境史の視点から見た食文化の継承と
活用―食文化遺産の保護体制に関す
る日台比較について

受入教員 藤原准教授
期間 十一月一日～
二〇一八年六月三十日

。漆 麟 西南大学美术学院准教授
日中戦争期のモダニズム美術に関する
日中比較研究

受入教員 石川教授

期間 十一月十五日～
二〇一九年十一月十四日

。丁 雨 北京師範大学歴史学院講師
中国遼金時代の陶磁器の研究

受入教員 向井准教授

期間 十二月十五日～

二〇一八年二月二三日

。安 東強 中山大学歴史学系副教授
清朝政府と革命党

受入教員 石川教授

期間 十二月十八日～

二〇一八年十二月十七日

外国人共同研究者

。Schermann, Sylke Ulrike

青島旧蔵ドイツ語文献中の法制関係資料の調査

受入教員 岩井教授

期間 二〇一二年四月一日～

二〇一八年三月三十一日（継続）

。李 周炫 ソウル国立大学歴史研究所・ユソン奨学財団奨学生

秦漢時代における国家の市場管理

受入教員 宮宅准教授

期間 二〇一六年八月三十日～

二〇一七年五月三十一日

。DE SOUZA, Lyle Francis ロンドン大学バーベック准講師

海外日系人の文学とディアスポラ・アイデンティティ

受入教員 竹沢教授

期間 二〇一六年九月一日～

二〇一八年八月三十一日（継続）

。PAPAZIAN, Frederic フランス国立科学研究所センター科学史研究ラボ
特任ソフトウェア技術者

『百科全書』デジタル共同批評校訂版

（ENCORE）構築のための技術開発

受入教員 王寺准教授

期間 二〇一七年二月二十日～

二〇一七年五月十三日

。ERICSON, Kjell David コネチカッ

ト大学歴史学部客員研究助手

ミキモトの真珠産業の帝国規模での展開とその資本主義的特質

受入教員 藤原准教授

期間 七月二日～二〇一九年七月一日

。LOUZON, Victor バリ政治学院 Junior Teaching Fellow

日本植民地・占有地の戦時（一九三七

～一九四五）における青年の準軍事的動員

受入教員 石川教授

期間 七月十五日～八月十四日

。陳 漢文 香港浸会大学中国語言文学

系助理教授

十三世紀後期・十四世紀初頭の臨安における文人の文芸活動

受入教員 永田准教授

期間 七月二一日～八月五日

。李 媛 北海道大学文学研究科専門研究員

日本古辞書の翻刻階層モデルの構築に関する人文情報学的研究

受入教員 安岡教授

期間 九月十一日～

二〇一九年九月十日

。魏 永康 東北師範大学歴史文化学院講師

秦漢時代の民族政策と辺境統治

受入教員 宮宅准教授

期間 九月二一日～

二〇一八年九月二十日

。劉 家幸 中央研究院中国文哲研究所博士後研究員

日本の漢文小説における仏教世界：江戸時代から明治初期を中心に

受入教員 永田准教授

期間 二〇一八年一月十八日～

二〇一九年一月十七日

受託研究員

。石 立善 上海師範大学哲学学院教授
日本所藏漢籍古抄本に関する総合的研究

受入教員 古勝准教授
期間 二〇一七年三月一日～
二〇一七年八月三十一日

外国人研究生

。梁 鎮海
明清交替期の地域社会：自己文書の視
角から

受入教員 岩井教授
期間 二〇一六年四月一日～
二〇一八年三月三十一日（継続）

。Kaya Oguzhan
近世・近代日本における宗教と生活圏
の研究

受入教員 稲葉教授
期間 四月一日～
二〇一九年三月三十一日

。金 英仁
近世京都の庶民生活空間としての門前
町―北野天満宮前町と祇園の比較を

中心に―

受入教員 岩城准教授
期間 四月一日～
二〇一九年三月三十一日

。陳 豪
宋代仏教寺院の考古学的研究
受入教員 岡村教授
期間 四月一日～
二〇一八年三月三十一日

。李 瀟
六朝時代の仏教思想が絵画創作にあた
えた影響
受入教員 船山教授
期間 四月一日～
二〇一八年三月三十一日

。呉 虹
六―七世紀日本における仏教美術遺存
から見た東アジアの文化交流
受入教員 稲本准教授
期間 十月一日～
二〇一八年九月三十日

。趙 曄
近代日本における中国労働者―人口移
動という視点から
受入教員 村上准教授
期間 十月一日～
二〇一八年九月三十日

期間 十月一日～
二〇一九年三月三十一日

。Caraballo Ricardo
日本の二重国籍者が国籍を放棄するプ
ロセスに関する探究的研究
受入教員 竹沢教授
期間 十月一日～
二〇一八年七月三十一日

。Vargha Attila
超境する日系二世アメリカ人のアイデ
ンティティ
受入教員 竹沢教授
期間 十月一日～
二〇二〇年三月三十一日

。呉 日勳
『莊子』郭象注の研究
受入教員 古勝准教授
期間 二〇一八年三月一日～
二〇一八年八月三十一日

東アジア人文情報学研究センター講習会

。二〇一七年度漢籍担当職員講習会（初
級）
第一期（九月二五日）
開催挨拶・オリエンテーション

漢籍について
岡村 秀典
永田 知之

カードの取り方―漢籍整理の実践

古松 崇志

第二日(九月二六日)

工具書について
高井 たかね

漢籍関連サイトの利用

Witern, Christian

実習を始めるにあたって
梶浦 晋

漢籍目録カード作成実習

第三日(九月二七日)

目録検索とデータベース検索

安岡 孝一

漢籍データ入力実習(一)

第四日(九月二八日)

和刻本について

大学院文学研究科教授

宇佐美 文理

漢籍データ入力実習(二)

第五日(九月二九日)

朝鮮本について
矢木 毅

実習解説

永田 知之

情報交換

安岡 孝一

終了挨拶

岡村 秀典

。二〇一七年度漢籍担当職員講習会(中

級)

第一日(十一月六日)

開講挨拶・オリエンテーション

岡村 秀典

経部について

古勝 隆一

叢書部について

藤井 律之

叢書と漢籍データベース

安岡 孝一

第二日(十一月七日)

史部について

宮宅 潔

漢籍データ入力実習(二)

第三日(十一月八日)

子部について

永田 知之

漢籍データ入力実習(二)

第四日(十一月九日)

集部について

大学院人間・環境学研究科教授

道坂 昭廣

漢籍データ入力実習(三)

第五日(十一月十日)

漢籍と情報処理
Witern, Christian

実習解説

永田 知之

情報交換

安岡 孝一

終了挨拶

岡村 秀典

お客さま

。九月二八日
フィリピン大学デイリマ

ン校学長
マイケル・リム・タン 他

三名(高木、石井が対応した)

。十二月十五日
韓国学中央研究院蔵書

閣研究員
安章利 他二名

(高木、矢木が対応した)

。十二月十五日
フランス社会科学高等

研究院教授
Jean-Frédéric Schaub

他三名

(高木、竹沢、佐藤、立木が対応した)

私たちはどう生き(残)るか？ 転形期と人文学

佐藤 淳 二

始まったものは、必ず終わる。どうも眞面目に見ても、近代の最初から続いてきた書物の時代の運命は尽きつつあり、私たちはその長い臨終に立ち会っている。大学生の読書時間がゼロに限りなく近付くのも、その一つの挿話に過ぎない。同じ若者たちも、漫画を読み漁り、膨大なネット情報を収集しているから、思考しているわけだが、やはり経験の様式は変化するだろう。どう変わるかが問題だ。一つには、言うまでもなく權威の蒸発だ。書物の權威は、よく言われるように、その確定性から生まれるが、それはどうしても著者から読者へという単方向の關係に支えられる。当然、フラット化し断片がお互いに映し合うようなネット時代に、書物は適応できない。文字は残り、書物は消えゆく。だがより重大なのは、文字から見えない世界を思い浮かべ、想像力を働かせる際の重要なツールを私たちが失うことだ。それは想像力それ自体を変質させるかもしれない。これは人文学の死活問題を超えて、人間の

思考そのものに関わる深刻な問題となる。

そもそも、人文学ないし人文科(の)学が、人間の意味を探索する学問分野だとして、そこでの人間の意味とは、それぞれの流儀で各人が「考えること」に尽きる。なにしろ、考える故に我有りとは、近代が共有する出発点なのだから。これでは漠然とし過ぎるから、もう少し絞って「学問」「学」において考えるとは何かと問うてみよう。かつて、フランス比較神話学の泰斗デュメジルは、五つの学問原則を掲げた。すなわち、①素材を残らず考慮し、②凝視し、③伝統も新説もともに疑い、④流行概念に囚われず、⑤大胆な推論と丁寧な検証を忘れるな、と。これは、学全般の心構えとして説得力がある。もちろんこの原則を守るデュメジルにとって肝心だったのは、二つの異なる事象を、時間と空間を軸として、出来るだけ客観化された「私」の眼が比較し、明確に記述し、分類し、想起することであった。この一連の流れこそ、学的に考えるということであり、そしてもちろん、このような「比較」を遂行するにあたって、書物ほど役に立つものはなかった。結局、私たちが属する文字文明は、考える技術として書物を中心にした長い時代を生きてきたのだし、考えることを探索する人文学とは、書物の時代を代表する学問だったのだ。

しかるに、私たちが目にしているのは、紙に印刷される書物という形態の喪失であり、それと相俟つてのデータ処理とAIの進歩であり、そうして思考を支える「比較」さえもが人間の手を離れていくという光景なのだ。書物の終焉とデータ処理の進展を通じて到来しているのは、すべてが深層に至るまで変容するスーパー転形期であろう。こういう時代には、天才的作品からゲテモノまで多種多様なものが生まれる。古い中心はまだ鼓動しているが、同時に新しい中心が胎動し始めるため、時代はあたかも二つの中心をめぐる楕円の歪な軌跡を辿る運命にある。

例えば、吉野源三郎『君たちはどう生きるか』（岩波文庫、新潮社『日本少国民文庫』版は1937年7月刊）は、作者の吉野が、戦後、岩波『世界』の初代編集長として活躍したことを考えるだけでも、戦前戦後を繋ぐ教養文化の中心に位置するだろう。そして、新進の芳賀翔一による同書のマンガ版（マガジンハウス社2017年刊）は、対極的な脱教養の中心にあたる。同じ小さな書物が、遠い二つの中心を持つ楕円の軌跡を描く大きな運命を持ったともいえよう。少国民文庫版は、盧溝橋事件の直後という危機の時代の証言としてあり、岩波文庫版は、戦後民主主義のヒーロー丸山真男の渾身の文章が添えられて、これも一つの証

言となつてゐる。その歴史的に規定された書物が、新装開店どころか全く別の生命を持つて登場し、半年で二百万部の売り上げを達成したという。内容については、先に触れた丸山真男の模範的な読解で尽くされている。ただ、イジメという現代テーマ以外では、主人公コペル少年がメンターたるおじさんとデパートの屋上から下を眺めていて、突然に、人間は分子であると実感し、自分の視野から抜け出して普遍的な視点から世界を見る経験をするという興味深い場面を挙げたい。天動説から地動説への転回に因んでコペルニクスを渾名とされる少年の姿に重なるのは、作者吉野の東京帝大哲学科時代のカントの記憶だろうか、あるいは彼の学生時代に日本を席卷した所謂「アインシュタイン・ショック」（金子務の研究を参照せよ）の残映だろうか。ともかく、この離人体験ともいえる挿話は、マンガ版でも重視されている。望遠鏡で遠くを見たら自分自身がいた、という現代ではお馴染みの堂々巡り、自己言及的な説話の構造が若い感性にも何かを訴えるのだろうか。楕円の中に、無限に楕円が増殖する。

一見すると歪んだガラクタが並ぶアーケード商店街をそぞろ歩く振りをして、実は探偵の眼力を発揮して、過去から何か「別の」未来へ通じる道標を探すこと。これはバロックから20世紀に繋がる有名な遺言だ。私

たちもまたこの遺訓に従い、生き残る術を学ぶしかない。

龍門研究の継承・更新・発信

稲本 泰生

「龍門北朝窟の造像と造像記」と題する研究班が発足して、一年が経過した。毎回研究所の蔵する拓本を素材として、龍門北魏窟の代表格である古陽洞の造像記を中心に、一つ一つ読み解く作業を重ねている。参加者の多くが美術史・考古学を専攻するこの班では、文字資料の内容を対応する造像の位置関係や彫刻の造形と照合して検討し、理解を深めることに注力している。これは決して、読解力不足を糊塗するための弁ではない——自分の予定では近い将来、こう言い放つことになっている。

古陽洞では窟内の壁面全体に大小様々な仏龕がうがたれており、造営過程は複雑である。願主は造像のペースを求めるのか、既製品を求めるのか。荒彫り段

階で制作をやめている仏像や、文字が未刻の銘区は売れなかったのか、途中で資金が切れたのか。刻銘は別料金だったのか。不動産の分譲と重ね合わせて益体もない想像を巡らせつつ、画像を観察するのは楽しい。寄進者も多彩である。信徒団体の構成・序列や掛け持ち、比丘尼や宦官による発願等々、造像の背後にひそむ人間模様への興味はつきない。美辞麗句を連ねた文面が多いが、刻字の手順からみて石工が文字を読めたか疑わしいことも、研究班の席上で教わった。

昨年検討した資料の一つに、早崎梗吉が二十世紀初に現地で自ら採った、仏龕の拓本がある。紙面には「天真（師の岡倉天心にちなんだ早崎の号）手拓」の方印が、実に十二顆捺されている。これでもかという自己顕示に気圧される一方、如意を手にして象に乗る普賢菩薩の図像を初めて目にし、頬が緩む。原寸大だからこそ得られる感覚、拓本鑑賞の醍醐味である。しかしこうした喜びは、二十世紀前半に龍門石窟が蒙った略取に直面することにもつながる。この小さな普賢像は、今は現地にない。造像記もろとも亡失、という場合も相当数あり、これらの事例は龍門研究院が現存する造像記に振った通し番号から漏れている。少々大げさにいえば、原石とともに戸籍を失ってしまった状況にある。

『龍門石窟の研究』（一九四一）に結実する水野清一・長廣敏雄の現地調査が行われたのは、一九三六年のことである。北魏随一の勅願窟である賓陽中洞の前壁浮彫は、水野らが現地入りした前年頃に掻き取られ、両人は僅差でこの傑作に出逢えなかった。本書にはやり場のない憤懣が綴られており、その落胆は察するに余りある。現地政府から厳しく制限され、警護と監視のもと行われた調査はわずか六日。作品の受難と国際情勢の悪化、中国文物の研究が黒い影に覆われていくなかで、再調査は断念を余儀なくされた。

この状況を救ったのが黒川幸七寄贈の拓本資料である。水野・長廣らによる雲岡研究の影に隠れがちだが、『龍門石窟の研究』は現地調査に基づく資料の不足を、拓本に基づく石刻文（主に造像記）の採録と活用で最大限補っている。翻刻・校定などに膨大な労力が投入された「龍門石刻録」は他の追隨を許さない充実度を誇り、附載された塚本善隆の論文はこれを駆使した空前の北魏仏教史論である。「石刻録」には、対応する拓が得られないため既刊の金石録から転載した造像記をまとめた項目がある。その名も「待訪録」、将来の増補改訂を前提としているかのようだ。

北魏の二大石窟である雲岡と龍門は様々な面で対照を示すが、石刻文の多寡は最も大きな違いの一つであ

る。雲岡では稀少、龍門では膨大。現地の石窟と彫刻本体以外に拠るべき材料が少ない雲岡と、海を渡った拓本で現地調査の不備を一定以上カバーしえた龍門。両者の地理的な位置関係が逆だったから、前身も含めた人文研の中国石窟寺院研究は全く違う結果に終わったはずである。現地調査が河南で挫折し山西で成功したことは時局と深く関係しているが、文化財の存在形態の相違も、特長を異にする二つの成果を誕生させた一因であろう。

今日の研究水準に照らして前述「石刻録」を再点検し、内容の拡充と精度の向上に貢献すること——この目標は、造形を重視する本研究班においても、自然に共有されている。すでに古典の地位を得た報告書の価値を再生産し、発展的に継承していくにはメンテナン스가欠かせない。これを生んだ研究機関に課せられた義務でもあろう。『龍門石窟石刻集成』（曾布川寛編、二〇〇〇）はそうした成果の一つであり、新中国の編號との照合などで多大な恩恵を蒙っている。また必然的に「これは何という字か」という議論に時間が費やされるが、ここで絶大な威力を発揮するのが、二〇〇五年以来運用されている附属人文情報学研究センターの拓本文字データベースである。その龍門分の補正という新たな課題もみつき、所内における最近の整理

で未使用の拓本資料も加わった。アップデートでもたつくPCのような自身に苛立ちながらも、回を追うごとに少しずつ前進しているのを実感する。

メランコリー

岡田 暁生

私くらいの年齢になると、いやでも人生の中の「昨日」の比重が大きくなってくる。「今日」しかない子供時代、「明日」に向かって突き進むしかない青春時代はもちろん、そろそろ「昨日」が意識されるようになってくる四十代と比べても、これは明らかに違いだ。四十代の頃の「昨日」は、たとえもう終わった出来事であっても、それが現在に流れ込んで、まだ脈打っている感覚があった。いうなれば現在完了形としての過去である。それに対して今の私が感じる「昨日」とは、現在から切断された昨日、過去形として過去だ。子供時代から音楽を聴くことは大好きだった私だが、同じ「音楽を聴く」といっても、あの頃と全然別のことを

しているのではないか、かつてと同じ曲の同じ録音を聴いているときですら、知らぬ間に中身は全然別物になっているのではないかという妙な感覚をおぼえることすらある。自分が今日と昨日とに分裂して、一方が他方を他人事のように観察している、ほとんど離人症的な感覚といえばよいか。

もちろん年齢を重ねるというのは大なり小なりそういうことではあろう。しかし私自身は、これが単なる個人的な感傷などではなく、何かもつと大きな世界の地殻変動のようなものと深く関わっているような気がしてならない。例えば音楽でいうならば、かつてはあって当然だった国民的あるいは世界的な「ヒットソング」——老若男女を問わず世間の誰もが口ずさむ歌——などというものはいつのまにか姿を消してしまい、前衛音楽やモダンジャズやハードロックといった「とんがった」音楽も過去の遺物となって、世間には「癒し系音楽」が大量に氾濫し、「レコード・コレクション」というブルジョワ的な趣味はネット配信にとつてかわられ、アプリをダウンロードして誰もが簡単に「作曲」ができるようになった。ここまで音楽をとりまく環境が一変してしまつて、まだ「音楽を聴く」という行為がかつてと同じものであり続けていることはそもそもありえない。昔大切なレコードで何度も聴い

た「あの曲のあの録音」を今日ネット動画で聴くとき、私たちは果たして同じものを聴いていると言えるのだろうか。実はいつの間にか別世界に連れてこられていて、そこで同じ「あの曲」を聴いている夢を見ているだけなのではないか。

2014年度まで7年間に及んだ「第一次世界大戦の総合的研究」班の結論は、端的にいえば、「第一次世界大戦こそ私たちが今生きている『この』息苦しく得体のしれない世界の起点であった」というものであった。しかししばしば——そして残念ながら——一つの研究を完成できたと思っただ次の瞬間にようやく、その結論に対する根本的な疑問が湧いてくることがある。「本当にそうか？」という、自分自身が確信していたはずの結論への懐疑。ひよつとすると第二次世界大戦が終わってから二一世紀の今日までの間のどこかに、まったく私たちの目には見えないような形で、両大戦にも匹敵する時代の亀裂が生じていたのではないかとつゆほども痛みを感じないうちに。

第一次世界大戦中に書かれた『非政治的人間の考察』においてトーマス・マンは、ゲーテの「全生涯を通じて自分の足下に同一の文化的基盤を、同一の思想的基盤を感じておれる人は、幸福だといわねばならない」という言葉を、深い共感をもって引用した。マン

は一八七五年生まれであるが、自分が依って立つてきた文化的社会的基盤を大戦によって木端微塵にされた自らの運命を、フランス革命の「前」と「後」を横断して生きざるを得なかったゲーテのそれに重ね合わせたのである。以前の私は、こんな風に人生の中で世界の風景が一変してしまう亀裂を体験できるのは、ゲーテやマンのような歴史上の偉人だけであり、こうしたドラマチックな時間の裂け目は自分のような凡人には一生無縁だろうと、漠然と考えていた。「そのとき歴史が動いた」式の、世界が一変するような体験は、偉人伝のヒーローにこそふさわしいフィクションなのであった。

もちろん私を含めて今日生きている多くの人々にとつて、例えばマンが経験したような全世界規模の世界の変貌は、いまだに身をもって体験したことはないヴァーチャルなもの——例えば報道映像の中だけの出来事——にとどまってはいるだろう。だが9・11や3・11のような時間の亀裂ですら、人々の意識の中で——多くの場合は様々なメディアによる巧みな心理操作によつて——いつの間にやら痛み止めの薄い膜をはられて瞬く間に修復され、何事もなかったかのような日常が回復する。この無痛性ともいふべきものが、現代世界の特徴だ。だがネットのヴァーチャル世界に夢中に

なっているうちに、私たちは実はいつのまにか何千年も離れたまったく別世界に連れてこられていたとしたら？ この別世界こそが Our Ageだとすれば？ 二〇一八年度から立ち上げた共同研究班「21世紀の人文文学——『Our Age』を問う」は、この疑問から出発している。

ひとりぼっちの研究班

——中国古代の基礎史料

浅 原 達 郎

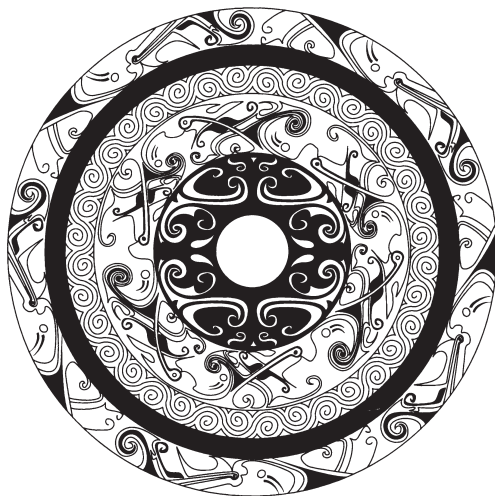
学生のための共同研究班として、二〇〇四年からやってきたのだが、学生班員はひとりまたひとりと、職を得て、社会に巣立っていった。まことによるこばしいことである。そして、ふと気がつくと、残されたのは老いた班長がひとり、さりとて研究班はつづけていかねばならない。こうして、たったひとりの共同研究班とはいかなるものか、という最後の命題に向き合うことになった。榫問答ならば、これぞ祖師面壁の意、

で片づくところである。

海外留学した学生が研究班に参加することができるようにと、インターネット経由のビデオチャットをこころみたとがある。そのうち、コンピュータの画面を共有すればよいことに気づいて、その便利さに驚いた。ところが、残念なことに、留学先の回線の状態があまりよろしくなくて、すぐに接続が切れてしまう。そこで、それを補うために考えたのが、コンピュータの画面を録画して動画を作り、あとでゆっくり見てもらうという方法である。いまのコンピュータでは、画面の録画もそんなにむずかしくないのであった。その後、ビデオチャットは必要なくなったのでやめてしまったが、画面録画は毎回ずつと続けるならいになった。だいたい、学生班員のまえで、班長が竹簡を読み聞かせるというスタイルなので、画面と班長の声が入った動画があれば、わが班としては充分なのである。会議用のマイクを使うので、学生班員の声を拾うこともできるのだが、録画している間だけ、なぜかみな押し黙る。

ひとりになってみて思ったのだが、聞き手がおらずとも、同じように竹簡を読み、動画を作れば、これまでとなくにも変わらない。そればかりか、動画を最終目的とすれば改善の手立ても見えて来る。これまでの方

法ではコンピュータ自身の発する音が入らないが、まとめて音声を取り込む手段もあって、インターネット上の投稿動画などでは需要があるらしい。わが班でもこれを援用すれば、前回の動画を画面に流しつつ、そこにコメントを重ねて録画し、前回の自分と今回の自分との共同研究だ、などと、いろいろ可能性が広がる。そこで、そのための道具もそろえ、マイク片手にひとりぶつぶつ、同時にヘッドホンで確認しながら、録画もする、というのが、あらたな研究班の作法となった。これも一種の面壁と言えようか。月に一度は、年長の班員が集まり、動画を流しながらあれこれと談義。それをまた録画することも可能なのだが、許可がおりない。



固焼煎餅ヲ柔ラカク咀嚼スルノ論

池田 さなえ

最初の論文を発表して以来、明治立憲制創設後一〇年前後の時期に焦点を当てて皇室財産の研究を続けてきた。手法は専ら政治史的、それもオーソドックスな政治過程論に近いものだし、皇室の財政制度や会計法制にも及ぶ。皇室財産の中でも特に御料地という素材を扱っているため、伝統的な地主制論や土地制度史の研究とも接続する。日本史の研究者の中でも、私の研究は「硬派」な部類に入るのだと思う。

しかし、私をよく知る人は私のことを、あるいは「書くものは硬派で堅実だが会ってみるとぶっ飛んでいた」などと評する。確かに、伝統的でカタい素材を見つめているながらも、どこか頭は宇宙のようなところに「ぶっ飛んで」いるのかもしれないと自覚するところもある。

政治史は、カタい分野である。高校の教科書を更に細かくしたような記述の中に、数えきれないほどの人物や政党などの固有名詞が登場し、出来事をひたすら

淡々と叙述していく。ほぼ一行ごとに置かれる註釈は、話の流れを容赦なく断ち切る。興味の無い人には、ただただ退屈な分野なのかもしれない。

しかし政治史は、物語りでもある。政治家や官僚たちは、史料の中で動いている。私は、堅苦しく退屈に見える政治史史料から政治家や官僚、当時を生きた人びとの活き活きとしたうごめきを見出し、そこに命を吹き込んでいき、大きなスペクタクルはないものの愛憎入り乱れる人間ドラマを描き出す政治史の営為に惹かれ、この世界に足を踏み入れた。それは、あたかも固焼き煎餅を口に含んだまましばらく味を堪能しつつふやかしたのち柔らかく咀嚼するような、地味で時間のかかる、しかし味わい深い営為なのだと思う。

特に明治の政治史は、幕末の動乱を潜り抜けてきた海千山千の政治家たちが、その強烈な個性をもって織りなすドラマであるところに魅力がある。根が明るく楽天的で新たな仕組みを創り出すことが大好きだが一所に落ち着いてられない伊藤博文、対照的に猜疑心が強く慎重で身の回りを派閥で固めながら着実に権力を手中に収めた山縣有朋、政治的実力も功績もありながら酒癖が極端に悪いのが玉に瑕な黒田清隆……。そして、私が研究を始めてから、ずっと史料の中で歌ったり踊ったりしてくれていた品川弥二郎（明治の政治

家・官僚。天保一四年閏九月二十九日（明治三年（一九〇〇年）二月二十六日）もまた、一般的な知名度の低さにも関わらず、強烈な個性を放つ点では右の有名人たちに決して劣らない。

国立国会図書館所蔵の「品川弥二郎関係文書」には、膨大な未刊行の書類が収められている。この書類の目録を眺めると、いったいこの人は何なのだろうという印象をもつほどに、書類の内容が他分野・他領域にわたっている。彼の主戦場と考えられている政界の書類のみならず、産業関係、教育関係、維新の顕彰の類から仏教・神道関係の書類もある。一般的に政治家はジェネラリストであり、社会全般の事象に通じていなければならぬものだが、品川の場合は彼が省庁を掌理する立場にある時に限らず、その生涯を通じて万遍なく広い分野の問題に関心を持って取り組んでいた様子が見えてくる。それは、品川が権力に近い位置に居るということのみならず、彼の人間的魅力によるところも多分にあるのではないかと思われる。

「やじ」という自称を愛用し、公文書のサインまで「やじ」を使ってしまう品川。食べ過ぎていつも胃や歯を悪くしてしまうほどの甘味好きで、心配した伊藤博文に羊羹を取り上げられてしまう品川。カッとなりやすくすぐに床を蹴ったり大声で怒鳴ったりしてしま

うが、後になってクヨクヨと悩んでしまう品川。書簡の書き方も独特で、現代人にも通じる軽いノリとセンスがある。そんな「やじ」を愛し、彼ならばといういような案件を持ち込む人びとがいて、「やじ」も人情に厚く人の頼みを断れないところがあつたのではないだろうか。

かように史料の断片を繋ぎ合わせていくうちに、「やじ」と何十年來の知己であるかのような錯覚を覚えることがある。「やじ」に限らず明治の政界には、論文や研究書に載せることはできなくとも、その人物の性格や行動の動機を理解する助けとなるエピソードに事欠かない。私はいつか、そうした史料に限りなく忠実に依拠した小説や映画などを作りたいと夢見て研究を続けている。もちろんこれも今はまだ妄想に過ぎない。しかし、私が固焼き煎餅を咀嚼するような地味な作業を続けていることで、この夢想に共感し、協力してくれる人が現れるかもしれない。そう信じて、今はまず目の前の固焼き煎餅の美味しさを伝える努力をしようと思う。

しかし品川は固焼き煎餅を食べるだろうか。明治政府の「スイーツ男子」とはいえ煎餅もおそらく嫌いではないだろう。しかし固焼き煎餅などを手土産に持っていこうものなら、たちまち「長年虫歯を病んで

居るやじにかやうなものを寄越すとは、貴様はやじを齒無しにするつもりか」と大目玉を頂戴するに違いない、などと考えていると、またひとり笑みが零れる。

スッポンにひそむ 「小さいおじさん」

中西竜也

明の萬曆（1573-1620）の頃から、中国各地でスッポン（鼈）にまつわる、ある怪奇現象が報告されるようになった。

たとえば、徐燭の『徐氏筆精』巻八に、かく伝える。杭州の張某がスッポンを蒸し焼きにしていると、とつぜん調理中の釜の中から声が聞こえた。怪しんでその釜からスッポンを取り出して見ると、それはすでに死んでいたが、その腹を裂くと……

其の腹を剖くに中に人有り、長さ二寸、眉目口鼻肢體手足一つとして具わらざる無く、跣跣して蓮花上に座す。

……おわかりいただけただろうか。スッポンの腹の中

で、身の丈二寸ほどの小人が、仏像よろしく蓮華の上に結跏趺坐していた、というのである。万曆三十六年（1608）、福建巡撫金學曾（字子魯）がこれを実際に目睹した上、徐燭に語ったことだが、近年日本の巷でも噂になった都市伝説「小さいおじさん」を彷彿とさせる話である。

また、王士禎（1711年没）の『池北偶談』巻二十には、明末天啓二年（1622）の進士で河南南陽知府となった張允恭の体験談としてこう記す。川浚いの人夫たちが、煮炊きしていたスッポンから「私を殺さんでくれ。君を利するから……」と声がしたので、その腹を開けてみると、眉目宛然たる小人が現れた。それが張氏に献上された。識者はこれを『管子』にいう涸沢の精「慶忌」に同定した、という。

さらに続けて、康熙十一年（1672）、山東済南でも、蒸し焼きされたスッポンの腹の中から小人が出現したと述べ、それをこう描写する。

また腹中に小人を得る。回回の状の如し。

……おわかりいただけただろうか。こんどは「回回」、つまりムスリムのような外見であったというのである。紀昀（1805年没）の『閩微草堂筆記』巻五「灤陽消夏録」五）には、もっと具体的な証言がある。彼の祖母の従弟で四川布政使（在任1765-17）だ

った張逢堯（字寶南）の母のために、料理人がスッポンを調理すべく首を切ったところ、中から小人が出てきてスッポンの周囲を走り回った。そいつは料理人が驚いて昏倒しているうちに姿をくらましたが、スッポンの腹中にはもう一人小人がいた。こいつはもう死んでいたが、居合わせた紀昀の祖母と当時まだ幼かった母はそれをはっきり見たという。「装束が『職貢図』に描かれた回回の如きで、黄色い帽子に青い着物、赤い帯に黒い靴」という出で立ちだったとか。緑色のジャージを着て走って逃げるといふ、件の「小さいおじさん」も真っ青である。

加えて、この「回回」の小人について私塾の教師岑某が披露した蘊蓄も紹介される。曰く、これは「鼈寶」と呼ばれるもので、人の腕の肉中に埋め込むと宿主の血を食らって生きるが、そうやって「鼈寶」を腕に仕込んだ人は、地中の金銀珠玉を透視できるようになる。「鼈寶」が血を吸い尽くすと宿主は死ぬが、子孫がそれを再装備して宝探しを続けることも可能で、そうすれば家は富む。寄生虫ダイエツトも霞むぐらい、キャッチーな言説である。

これらスッポンの怪異は、ときに仏像然とした小人と目され、またあるときは涸れ沼の精、さらに別のケースでは「小さいおじさん」ならぬ小さい「回回」と

見られたが、それが実のところ何であつたかは、結局未詳である。しかし明清時代の中国各地の人々が、スッポンの体内には何か得体の知れぬちっちゃい奴が時々いると、同じく認めていたことは確かである。そして興味深いのは、その未知なる何かを、彼らがそれぞれに既知なものによって様々に把握・説明しようとしたことである。

中でも、そのあやかしを「回回」と識別した人々がいたことは、とくに注意を引く。おそらくその目撃者たちは非ムスリムであり、彼らにとってムスリムは、その存在自体を知ってはいるものの内実の不明な者たちだっただろう。その印象はまさに、小人となつてスッポンの中に隠れていそうな不思議な連中というものだったのではないか。また、明清時代の非ムスリム中国人のあいだで、ムスリムは宝石鑑定に長けることで有名で、その技能は一種驚異とさえ感じられていたようである。『閱微草堂筆記』の「鼈寶」の説は、いみじくもそれを反映していよう。スッポンの中の不可解な何かが「回回」に引き当てられた背景には、当時の非ムスリム中国人がムスリムにたいして持っていた神秘的イメージ、本当はよく分からないが固定観念によって認知しているという、その認識のあり方が、多分に作用していたと想像される。

不可思議なものを既成の概念におとしこんで理解・安心しようとするのは、人間の本性的衝動である。謎の小人の正体といった「事実」を追究するのも大事だが、それがどう解釈されたかを検討するのも、人文科学の醍醐味だろう。小さい「回回」について妄想するうち、改めてそう思ったりもした。

ちなみに、スッポンに潜む小人は、明清中国の人々の眼に「回回」と映ることが比較的多かったようである。方以智（1671年没）の『物理小識』巻十一は、スッポンの然る所以ないし生態を詳説する中で、「腹中に時に人を得る。回回の如し」とのデータを挙げている。いっぽう清の咸豊（1851-61）ごろの中国ムスリム学者、藍煦が、神の御徴——アラビア語で「アーヤズ」^{ayaz} といひ、漢語では音の近い「爾雅（erya）」の字で表記される——としての被造物を探求すべく、『爾雅』を模して著した辞書、『天方爾雅』の巻六にも、「鼈」の項目を立てる。そして、「鼈」はペルシア語でいう「バーヘbakhe」（陸亀）に相当し、「日午に珠を吐く」などと解説するが、「回回」の小人や「鼈寶」の秘術には言及していない。

移民と農業、アメリカと日本

徳 永 悠

桜が咲き始めたころ、久しぶりに家庭菜園の様子を見に行くと、雑草の中にサンチュの鮮やかな葉が見えた。昨年、作りすぎて放ったらかしていたサンチュの種が畑に散らばって、その一部が成長していた。さっそく二歳の長男が「おてつだいする」と重たいジョウロにゆらゆらと体をもっていかけつつ水やりをした。くれた。

この家庭菜園は二メートル四方ほどの小さいものだが、昨年初めてサンチュとミニトマト、ピーマン、そしてサツマイモを育てて収穫した。サツマイモは秋に近所の子どもたちと一緒に五十個ほど収穫し、保護者もくわわって焼いたり、蒸したりして食べた。昨年、野菜づくりに取り組んだ理由は二つある。一つは、自分で野菜を育てて食べるという生き物としての自己満足を得たかったからであり、もう一つは、自分が歴史研究の対象としている、アメリカに移り住んだ移民の経験をよりよく理解するための一つの手がかりにし

たかったからである。

アメリカでは建国当初から農業が主要産業の一つである。特に太平洋岸のカリフォルニア州では外国人労働者が農業を支えてきた。今日では高層ビルやハリウッドのイメージが強いロサンゼルス郡も、第二次世界大戦前はあちこちに農地があり、日本人農家はイチゴやセロリなどの作物の栽培をほぼ一手に引き受けていた。そして、そんな日本人農家の畑で農繁期を中心に働いたのは主にメキシコ人労働者であった。二十世紀前半、ロサンゼルス農地はただ野菜や果物を生産するだけでなく、環太平洋地域の人々が交わり、ときに衝突しながらも、人種や階級の違いを超えて理解を深める可能性を秘めた特殊な場所となっていた。

当時の日本人移民の農地は小さくても甲子園球場グラウンドくらいの大きさがあり、収穫は死活問題であったので、片手間に世話ができる自分の小さな家庭菜園とは比較にならない。それでも店に並ぶ野菜だけでなく、この小さな畑で土の準備から収穫までの過程に関わった野菜を食べるといふ経験を通して、アメリカに移住した人々が汗を流した作業そのものに対する理解をほんの少しとはいえ深めることができたような気がする。

今日でも多くの移民労働者がアメリカの農業を支え

ている。四年前に見学したカリフォルニア州のある農園でも、たくさんのメキシコ人労働者がイチゴやラズベリーを収穫していた。彼らの多くはアメリカ滞在資格を持たない非法移民であるが、彼らなしでは農業が成り立たない。農業大国かつ非法移民大国であるアメリカの現実といえよう。ロサンゼルス・タイムズ紙（二〇一七年三月十七日付）によると、同州の農業労働者の年収は約三万ドルで上昇傾向にあるが、アメリカ人は肉体的に厳しい農業労働を避けるため、農業労働者の九割は外国出身であり、その半数以上が非法移民だという。

このようにアメリカでは移民と農業が歴史的に深い関係を持ってきた。一方、日本については安岡健一が一九三〇年代に在日朝鮮人約二万人が農業に従事していたと重要な指摘をしているが、特に第二次世界大戦後においては日本の農地は移民労働者の主要な労働現場とは認識されてこなかったように思う。しかし、今世紀に入ってから外国人の労働力に頼る農地が拡大し、日本においても移民と農業の関わりが深まりを見せている。

日本では一九九〇年代までは家族労働者や近隣のパート労働者が農繁期の農家を支えてきた。しかし、高齢化によって臨時労働力を安定的に見つけることが難

しくなり、そこに農家あたりの農地規模の拡大が重なったことで、農業分野の労働者不足が深刻化した。そうした状況を打開するために、多くの農家が頼ったのが外国人技能実習制度であった(注)。この制度は一九九三年、国際貢献を建前に実際は労働力不足対策として始まり、農業分野にも適用された二〇〇〇年度以降、外国人農業労働者は増え続けている。二〇一七年十月の時点で、日本で農業に従事する外国人は約二万七千人おり、その九割がアジア諸国出身の実習生である。

日本政府は彼らを「移民」と見なしていないが、国連の定義では一年以上海外で暮らした人はすべて長期滞在の移民である。歴史学的にも外国人労働者は移民史の主要な研究対象である。日本政府はさらに外国人農業労働者を増やすため、昨年、国家戦略特区法を改正し、特区内の農地で外国人の受け入れを認めた。技能実習制度では認められていない農繁期だけの外国人雇用も可能となり、すでに茨城県や長崎県、愛知県などが制度利用の声をあげている。受入国の若者が避けがちな農作業を、規模が拡大した農地で、農繁期だけ外国人に任せる、という意味では、日本の農業労働がアメリカ化し始めているようにも見える。

かつて「農業移民」といえば海外に移り住んだ日本

人のことだった。しかし、近年、それはアジア諸国から日本に来る外国人を指す。農業の機械化および人工知能化が進んでいくとはいえ、少子高齢化が進む中、日本の農地を支える外国人は今後も増えていくであろう。アメリカの移民史を振り返ると、外国人農業労働はしばしば差別や格差の結果であり、それらを再生産する原因でもあった。今後、日本の農地を相互理解と共生の現場にしていくためには、雇用者と自治体を含む関係機関の積極的な取り組みが欠かせない。そして、彼らの取り組みを支えるには、海外から輸入した農作物だけでなく、国産の農作物の生産も外国人に支えられている、という社会認識を学校教育などを通して伝えていき、可視化していくことが大切であろう。

今年もサンチュやミニトマトなどの種をまいた。ふだん店で野菜を買うときも、日本で暮らす外国人が育てたのかもしれないと想像しながら、ありがたいただきたい。

(注) 橋本由紀「技能実習制度の見直しとその課題——農業と建設業を事例として」『日本労働研究雑誌』六六二号(二〇一五年九月)。

「科学の人、孫文」のその後

森 川 裕 貫

この文章の執筆依頼をいただいたのは、人文研からの転出を間近に控えた頃であった。何を書くかを考えてすぐに思い浮かんだのは、二〇一二年四月から二〇一七年三月まで人文研客員准教授を務め、一〇月に急逝された武上真理子さんのことであった。筆者は二〇一二年から学振PDとして、二〇一五年からは助教として人文研に在籍し、人文研での武上さんの活躍を、間近に目にした一人である。そこで、人文研から転出するにあたり、武上さんの功績の一端について述べたいと思う。

武上さんの単著『科学の人、孫文』（勁草書房、二〇一三年）については、いくつかの書評が出ている。詳細はそちらに譲るが、ごく簡単にその特長を述べれば、従来あまり注目されてこなかった英文史料を活用し、孫文とポピュラー・サイエンスの関わりを明らかにしたということになるだろう。

武上さんは同書の成果を基礎にして、研究の視野を

孫文以外にも拡大された。具体的には、近代中国と科学との関わりを、特に地質学と地理学に着目して解明する作業に着手され、充実した成果を次々に生み出したつあった（詳細は、人文研附属現代中国研究センターホームページ <http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~remc/takegamihm> を参照）。それらの業績は、英文史料の活用を引き続き注力しつつ、特に日本や欧米の科学史研究の成果を、より丁寧に参照するものであった。

武上さんの研究は、日本はもちろん、中国・台湾の中国近現代史研究の分野で、まず高く評価されるものであった。中国や台湾のシンポジウムにたびたび招かれ、報告を担当したことがその証左である。同時に、こうした研究手法は、日本の科学史研究分野においても注目を集めていた。武上さんは、科学史研究者の方々と親しく交流されていたが、それは人柄に加えて、広く科学史研究の成果を精力的に取り込もうとする姿勢が評価されていたからであろう。

驚異的であるのは、これほど充実した成果が、わずか一五年あまりの間に生み出されたということである。武上さんは京大文学部を卒業後、銀行をはじめいくつかの職場に活躍の場を求め、一八年あまりのあいだ、学問とは直接関わりのない世界に身を置かれた。だが、

一念発起されて、二〇〇二年に関西学院大学大学院に入学、本格的に学問の世界での訓練を開始された。二〇一二年には、京大人間環境学研究科で博士号を取得されている。

どうして比較的短い時間のなかで、内容豊かな多くの業績を世に問うことが可能であったのか。その要因として、ここでは二点を挙げたい。

第一に、研究対象に肉薄しようとする武上さんの真摯な態度である。二〇一二年の夏、武上さん、当時人文研助教であった小野寺史郎さんのお二人と南京を訪れる機会があった。名前は失念してしまったが、武上さんの一つの目的は、中国で客死したある欧米の人物の墓碑を探すことにあった。地図を頼りに三人で探したが見つからず、地元の人に聞いてもわからない。四〇度を超える暑さであり、蛇が出てきそうな藪も生い茂っていたので、私は内心早く帰りたいと思ったのだが、武上さんはあきらめることなく、とうとうその藪のなか奥深くにまで突き進んでいかれた。そうまでしても目当ての墓碑そのものは見つからなかったが、私にとっては武上さんの研究対象への熱意を感得する最初の貴重な経験となった。

第二に、人並み外れた努力家であったということである。これについて思い出されるのは、中国や台湾で

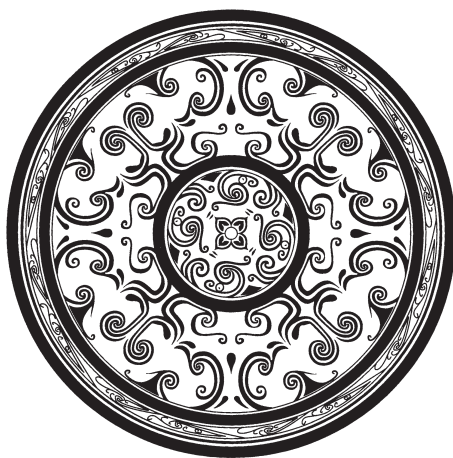
報告をする数日前になると、武上さんの部屋から中国語の音声が入ってきたことである。周囲に気を遣ってか小さな音量であり、いまとなつては子細はわからないが、報告の準備のためにおそらく耳を慣らしていたのではないかと思う。武上さんが中国語を本格的に勉強し始めたのは、研究生活に入ってからのことであり、中国や台湾に留学した経験もない。そのため、自分は中国語が全然できないと、ご本人はしきりに謙遜されていた。だが、中国や台湾から何度となく招かれ、中国語で報告・討論をしていたことが示すように、そのレベルは相当の高さにあった。それは、こうした努力により可能となったものであろう。

中国や台湾の研究者と話をしていると、日本の中国近現代史研究からかつてのような存在感が失われて残念だ、という指摘を受けることがある。首肯できる指摘であり、武上さんが取り組んでいた分野に関しても、日本以外の地域の研究者によって、次々と研究成果が生み出されつつある。

しかし、それらの成果は、えてして中国語の史料や中国内部の文脈にのみとらわれがちである。中国近現代の科学が内包していた国際的側面には、まだまだ考察が及んでいないと思われることも少なくない。まして、中国以外の地域を対象とした科学史研究の成果に

まで目配りをしている成果となると、そうは見当たらない。武上さんの研究がさらに進展していれば、国内外からいつそう高い評価を受けていたことは確実であろう。

「科学の人」としての孫文像にいったんは結実した武上さんのご研究は、さらなる飛躍の途上にあった。ご本人がそれを担う機会が失われたことは本当に残念だが、残された成果が広く参照され、今後の研究の発展に結びつくことを願ってやまない。



書いたもの一覧 二〇一七年四月～二〇一八年三月（氏名五十音順） ●は単行本

浅原 達郎

周公之琴舞の啓と乱
良臣・祝辞の書式
別卦の配列
曰古 二八号 十月
曰古 二九号 三月
曰古 二九号 三月

池田 さなえ

討論と反省（2017年度日本史研究会大会特集号 統合原
理と政治・社会・文化）——（近現代史部会共同研究報告）
日本史研究 六六六号 二月

インタビュ

未来に繋がる青いリボンのエトセトラ 四号 三月

池田 巧

俯瞰蔵羌彝走廊的語言分布及其相關的研究課題 張曦・黄成
龍主編『地域社会深描蔵羌彝走廊研究新視角』 九月

呂蘇語九龍県乃渠話概要 張曦・黄成龍主編『地域社会深描
蔵羌彝走廊研究新視角』 九月

悠久にして新しい中国語の歴史 東亜 六〇九 三月

A Phonological Sketch of a Tibetan Kham Dialect Spoken
in Mingyong Village in the Yunnan bDe chen Tibetan
Autonomous Prefecture. 岩尾一史・池田巧編『チベッ

ト・ヒマラヤ文明の歴史的展開』 京都大学人文科学研究
所 三月

石井 美保

「生きもの」としての共同研究班、または環世界の人文学

人文 六四号 六月

Caring for Divine Infrastructures: Nature and Spirits in a
Special Economic Zone in India. Ethnos: *Journal of An-*
thropology 82(4). 七月

New Ontologies and Persistent Questions. In Casper B.
Jensen et al. *New Ontologies? Reflections on Some Recent*
"Turns" in STS, Anthropology and Philosophy. Social
Anthropology 25 十一月

インドにおける野生、近代、神霊祭祀 『科研費NEWS』
VOL.3 十二月

精霊信仰 インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』
丸善 一月

神霊と社会運動 インド文化事典編集委員会編『インド文化
事典』 丸善 一月

フエティッシュ／フエティシズム 奥野克巳・石倉敏明編
『レキシコン現代人類学』 以文社 二月

石川 禎 浩

遠いふること

鶴翔 四七号 四月

中国共産党編纂党史資料的進程 (一九二九—一九五五)

中共党史研究 六期 六月

コミンテルンから中国革命・中ソ対立へ 松井康浩編『ロシア革命とソ連の世紀』第二卷 岩波書店 七月

「習近平」と「太子党」 図書 八二八号 十一月

中国ナショナリズムを考える—国歌の移り変わり

日中友好新聞 一月二五日

中国のテレビ番組「河殤」に見える文明・地理史観の来源
弘末雅士編『海と陸の織りなす世界史』春風社 三月

稲葉 穰

Across the Hindukush of the 'Abbasid Period. D. G. Tor (ed.) *The 'Abbasid and Carolingian Empires: Comparative Studies in Civilizational Formation*. E. J. Brill 十月

稲本 泰生

初伝期の仏像—仏教文化受容の様相／ソグド人の美術—東伝と変容『中国文化事典』丸善出版 四月

図版解説『雲岡石窟』第一九卷・第二〇卷 科学出版社東京・国書刊行会 八月

●松本文三郎旧蔵 龍門二十品拓本 (共編) 東洋学資料叢刊 第二四冊 十月

書評 倉本尚徳著『北朝仏教造像銘研究』

史学雑誌 一二六編一一号 十一月

奄然入宋と「釈迦信仰」の美術—南京大報恩寺址出土品を参照して『論集 日宋交流期の東大寺』奄然上人一千年大遠忌にちなんで—(ザ・グレイイトブッダ・シンポジウム論集第一五号) 東大寺・法蔵館 十二月

●センター研究年報二〇一七 特集 京都大学人文科学研究所蔵 龍門二十品拓本 (共編) 二月

岩城 卓二

●西宮神社文書 第一卷 (共編) 清文堂出版 六月

山崎藩の藩政日記について『揖保川流域のサムライ—大名たちの実像』龍野市歴史文化資料館 九月

大塩の乱と能勢騒動で武功をあげた武士—水野庄大夫の人生— 大阪春秋 一六八号 一〇月

老中御用部屋日記『諸用留』に記録される京都火消役と京都警衛に関わる史料 科研費成果報告書『近世中後期上方支配における山城国淀藩の基礎的考察』 三月

ウィッテルン クリステリアン

The Digital Triptaka and the Modern World. Jiang Wu and Greg Wilkinson (eds.) *Reinventing the Triptaka: Transformation of the Buddhist Canon in Modern East Asia*. 九月

王 寺 賢 太

「凡庸さ」とその分身たち―蓮實重彦『凡庸な芸術家の肖像』
覚え書き ユリイカ臨時増刊号『総特集・蓮實重彦』

九月

●(ポスト68年)と私たち―「現代思想と政治」の現在(市田

良彦との共編) 京都大学人文科学研究所／平凡社

翻訳 エティエンヌ・バリバル「大革命の後、いくつもの

革命の前」(立木康介・信友建志・廣瀬純との共訳) 市

田・王寺編『ポスト68年』と私たち 京都大学人文科学

研究所／平凡社

●「non-lieu」一步前―一九六〇―七〇年代日本のアルチュセー

ル受容 市田・王寺編『ポスト68年』と私たち 京都大

学人文科学研究所／平凡社

Esprit des Lumières, esprit de commerce? (compte rendu

de Hisayasu Nakagawa, *Esprit des Lumières en France*

et au Japon, Paris, Champion, 2015)

ZINBUN, no. 48 三月

岡 田 暁 生

●西洋音楽史(中国語訳) 南海出版公司(原書:中公新書)

七月

●クラシック音楽とは何なのか 小学館

十月

岡 村 秀 典

●鏡が語る古代史 岩波新書

五月

北魏平城期の雲岡石窟 濱田瑞美編『アジア仏教美術論集

東アジアI(後漢・三国・南北朝)』中央公論美術出版

●雲岡石窟の考古学 遊牧国家の巨石仏をさぐる 京大人文研

序文 秦小麗著『中国初期国家形成の考古学的研究 土器か

らのアブローチ』六一書房

中国古鏡を読む 引き継がれるコレクター魂 浦上父子コレ

クシオン展 岐阜県現代陶芸美術館

鏡にあらわされたシルクロードの奇獣

科学 八七卷一〇号 岩波書店 十月

三角縁神獣鏡は卑弥呼へ贈られた鏡か? 歴史REAL 邪馬

台国 洋泉社

鏡が語る古代史 山陰中央日報 十二月六日

長楽王丘穆陵亮夫人尉遲造像記、一弗造像記、比丘慧成造像

記、侍中護軍將軍北海王元詳造像記、都綰闕口遊徼校尉司

馬解伯達造像記、鉅鹿魏靈藏河東薛法紹二人等造像記、北

海王国太妃高造像記、高樹解伯都三十二人等造像記、比丘

惠感造像記、比丘法生造像記、太中大夫安定王元變造像記、

比丘尼慈香慧政造像記、馬振揖張子成許興族三十四人造像

記 稲本泰生・安岡素子編『センター研究年報二〇一七』

京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究セン

ター

二月

銅の円盤を磨き鏡にした古代中国 公明新聞 三月一八日

小川 佐和子

映像としての平安時代―「平安的なもの」のイメージ編成

助川幸逸郎ほか編『新時代への源氏学 一〇 メディア・

文化の階級闘争』竹林社 四月

日本の映画理論 大浦康介編『日本の文学理論―アンソロジー』 水声社 六月

初期日本映画における外国映画のリメイター―『憲兵モエビウス』から『大尉の娘』へ 北村匡平・志村三代子編『リメイ

ク映画の創造力』水声社 十二月

籠谷 直人

1930年代前半の日本綿製品の対イギリス領インド輸出を

めぐる論点…第一次日印会商(1933年9月25日-34年1月5日)の再論(小特集 アジア経済史の諸相)

人文学報 一一〇号 七月

菊地 暁

架空編集会議…「人文研探検」のこれまでとこれから 慶応

義塾大学出版会HP 四月

「要旨」鳥居小考／小鳥居考 熊楠 works 四九号 四月

民俗空間としての風景をみていた人々…私撰・生態民俗学者列伝 BIOCTY 七〇号 四月

〈BBS〉の片隅で…身体、書物、インターネット 田中雅

一編『フェティシズム研究 三 侵犯する身体』京都大学学術出版会 六月

読者論(共著) 大浦康介編『日本の文学理論…アンソロジー』 水声社 六月

起源論(共著) 大浦康介編『日本の文学理論…アンソロジー』 水声社 六月

いくつかの(こども風土記)…宝塚・大東亜・北白川 大塚英志編『動員のメディアミックス…(創作する大衆)の戦時下・戦後』 思文閣出版 九月

鳥居小考／小鳥居考 熊楠 works 五〇号 十月

「紹介」ジェイムズ・クリフォード『文化の窮状…二〇世紀の民族誌・文学・芸術』BAコンソーシアム編『多元主義』を理解するための三〇冊』ビブリオテカ・アレクサ

ンドリア・プロジェクト(電子書籍) 十月

●ライフヒストリーレポート選二〇一七(編著) 京都大学民俗学研究会 十二月

●二〇一七年度 大阪南部疾走調査報告書(共編著) 千年村プロジェクト 三月

●二〇一六―二〇一七年度 霞ヶ浦・筑波山周辺地域疾走調査報告書(共編著) 千年村プロジェクト 三月

●二〇一五年度 香川県善通寺市下吉田地域調査詳細報告書(共編著) 千年村プロジェクト 三月

●二〇一四―二〇一五年度 山口県山口市鑄銭司地域調査報告書(共編著) 千年村プロジェクト 三月

古 勝 隆 一

- 翻訳 井筒俊彦『老子道德経』 慶應義塾大学出版会 四月
告朔之餼羊 疏札記 能仁學報 第一四期 九月
魏晋期の儒教『魏晋南北朝史のいま』 勉誠出版 九月
書評 高橋均『經典釈文論語音義の研究』 東方 四四三号 東方書店 一月

小 関 隆

- 書評…長谷川貴彦『現代歴史学への展望…言語論的転回を超えて』 歴史と経済 二二六号 七月
書評…勝田俊輔・高神信一編『アイルランド大飢饉…ジャガイモ、「ジェノサイド」・ジョンブル』 西洋史学 二六四号 十二月

佐 藤 淳 二

- 急進的啓蒙、あるいは近代の未完の闘争のプロジェクト 週刊読書人 九月一日
孤独のアノマリー―事例オタネスとルソー政治思想 市田良彦・王寺賢太編『ポスト68年』と私たち、「現代思想と政治」の現在』 平凡社 十月

高 木 博 志

- 歴史都市京都のイメージと美術工芸 石川の歴史遺産セミナー講演録 石川県立歴史博物館 三月
陵墓問題の現在 歴史学研究会編『第4次現代歴史学の成果

と課題3 歴史実践の現在』 續文堂出版

- 明治十年天皇行幸と富岡鉄斎 富岡鉄斎―和泉国茅渚海畔の寓居にて 堺市博物館 五月
修学旅行と明治神宮以前・以後―奈良女高師生の帝都東京体験 神園 一七号 五月
150年前の転換点 維新の影と主役たる市民に目を 毎日新聞 八月二十四日

小波魚青『戊辰之役之図』とその時代 大政奉還150周年記念展 新発見!『戊辰之役之図』 星野画廊 九月

- 古都の深層―秘められた場の歴史 東寺 美術価値見いだされ文化財化 京都新聞 十月十一日
古都の深層―秘められた場の歴史 嵯峨 社寺復興で古典の世界視覚化 京都新聞 十月十八日
「日本美術史」の形成と古都奈良・京都 井上章一編『学問をしばるもの』 思文閣出版 十月

古都の深層―秘められた場の歴史 御所のどかさ一変 政局の緊迫映す 京都新聞 十二月十三日

- 古都の深層―秘められた場の歴史 泉涌寺 明治にも残った皇室の仏教信仰 京都新聞 十二月二十日
「郷土愛」と城跡の近代―藩祖と桜を中心に 近世城跡の近現代(平成二八年度 遺跡整備・活用研究会報告書) 奈良文化財研究所 十二月

富岡鉄斎が描いた国史―名教の精神を芸術に寓す 史林 第一〇一卷第一号 一月

- 古都の深層―秘められた場の歴史 祇園・円山 観光と密接

に関わった性

京都新聞 二月七日

江戸から明治へ京都御所と御苑の歴史を綴る(前編)

ついでての報告 文化人類学 八二卷三号 十二月
センサス アメリカ学会編『アメリカ文化事典』丸善出版

京都御苑ニュース 第一三七号 三月一日

多文化主義 アメリカ学会編『アメリカ文化事典』丸善出版

●人文学報(編集)

特集…日清戦争と東学農民戦争 一一一

号

三月

高階 絵里加

山本芳翠『西洋婦人像』

國華 一四六七号 一月

展覧会 日本経済新聞(夕刊)

五月三十一日、六月二三日、

八月二三日、九月一八日、一〇月三十一日、十一月一〇日、

二月八日、一月二六日、二月一六日、三月九日

竹沢 泰子

●新装版

日系アメリカ人のエスニシティ—強制収容と補償運動による変遷 東京大学出版会

動による変遷

五月

●人種化のプロセスとメカニズムに関する複合的研究

平成二

八年度研究成果報告書 京都大学人文科学研究所

六月

書評 ジョン・L・ルーリー、シェリー・A・ヒル著(倉石

一郎、久原みな子、末木淳子訳)『黒人ハイスchoolの歴史

史社会学—アフリカ系アメリカ人の闘い 1940-1980』

図書新聞 六月十日

Antiracist Knowledge Production: Bridging Subdisciplines

and Regions. *American Anthropologist*. 119(3)

(資料と通信) 日本学術会議多文化共生分科会シンポジウム

九月

「地域社会における外国籍生徒—義務教育以降の問題」に

武田 時昌

富士川文庫と藤浪鑑の夢体験

医道の日本 八八三号 四月

思孟学派の「五行」説

医道の日本 八八四号 五月

運氣論と南蛮天文学

医道の日本 八八五号 六月

運氣論で四元素説を批判する

医道の日本 八八六号 七月

The Six Incurables and Four Difficulties: An Examination
of the Paradigms of Chinese Medicine from the Per-
spective of Shu-shu Studies. *ACTA ASIATICA: Bulletin of the Institute of Eastern Culture*. 113.

腹の虫から結核菌へ—伝屍の古病理学

医道の日本 八八七号 八月

老官山医簡と漆人形の衝撃証言

医道の日本 八八九号 十月

スポーツ医学のコンタクトゾーン

医道の日本 八九〇号 十一月

六神丸と近代日本

医道の日本 八九一号 十二月

ヒトと国家の健康寿命

医道の日本 八九三号 二月

何が東洋医学を進歩させてきたのか

医道の日本 八九四号 三月

田 中 雅 一

Institution and Ritualization. Koari Kawai (ed.) Institutions: *The Evolution of Human Society*. Kyoto University Press and Trans Pacific Press 四月

ナンバリングとカウンティング・ポスト・アウシュヴィッツ時代の人類学にむけて 渡辺公三・石田智恵・富田敬大編『異貌の同時代―人類・学・の外へ』以文社 五月
愛撫する手 岡田守彦編集代表『手の百科事典』朝倉書店 六月

●Contact Zone (コンタクト・ゾーン) (編集) 九号 人間・環境学研究科 十二月

●特集 ムスリム社会における名誉に基づく暴力 (客員編集) 十二月
文化人類学 八二巻三号
特集 ムスリム社会における名誉に基づく暴力「序」(共著) 十二月

文化人類学 八二巻三号
女性への暴力 インド文化事典編集委員会編『インド文化事典』丸善出版 一月

●トラウマを生きたる (共編著) 京都大学学術出版会 三月
序章 いま、トラウマを考える 田中雅一・松嶋健共編『トラウマを生きたる』京都大学学術出版会 三月

女性への暴力、虐待、性暴力 田中雅一・松嶋健共編『トラウマを生きたる』京都大学学術出版会 三月
エドマンド・リーチ、フレデリック・バルト 岸上伸啓編『よくわかる文化人類学』ミネルヴァ書房 三月

《第十二回日本文化人類学会賞受賞記念論文》(格子)と

《波》とナシヨナリズム―巨大な遺体安置所で *Lone Trip* を聴きながら考えたこと 文化人類学 八三号 三月

田 中 祐理子

新刊紹介・グザヴィエ・ロート『カンギレムと経験の統一性 判断することと行動すること 一九二六―一九三九年』表象文化論学会ニューズレター REPRE 三二号 七月
翻訳・解題 ジローラモ・フラカストロ『伝染・伝染病およびその治療について』原典 ルネサンス自然学』上巻 八月

名古屋大学出版会
レーウエンフックの「医学研究」ウェブサイト「医学史と社会の対話」 十二月

顕微鏡が変えた世界の見方―人体の内と外『特別展「人体―神秘への挑戦」公式図録』国立科学博物館・NHK 三月

立 木 康 介

ラカンと女たち 第四回 序 (其四)―ファルスがある／性関係はない 三田文学 第二九号 五月
コラム これは愛ではない、田中雅一編『侵犯する身体』(フェティシズム研究3) 京都大学出版会 六月

書評 死に傾斜する男、生に誘う女―高橋順子著『夫・車谷長吉』文学界 二〇一七年七月号 七月
翻訳 ウォーレン・ペリー・Jr.『メンフィス英雄神話―リアル・ロッキンローラー、文化的オブセッション、歴史的ナ

ラティヴ内部の元型的モチーフ」

人文學報 第一一〇号 七月

翻訳 ターニャ・ヤング「世界のキング―翻訳されゆくエル

ヴィス・イメージ」 人文學報 第一一〇号 七月

ラカンと女たち 第五回 序(其五)―女なるものとその享

楽 三田文学 第一三〇号 八月

ラカンと女たち 第六回 オフィリア―幻想の構造と対象

への関係 三田文学 第一三一号 十一月

ラカンと女たち 第七回 マリー・ボナパルト(前)―キャ

ステイング・ヴォート握るプリンセス

三田文学 第一三二号 二月

徳 永 悠

書評 藤岡真樹『アメリカの大学におけるソ連研究の編制過

程』 人環フォーラム 三六号 二月

永 田 知 之

中国文学理論の日本への影響 大浦康介編『日本の文学理論

アンソロジー』 水声社 六月

ハンブルク再訪 人文 六四号 六月

詩序と書簡の間―唐代以前の贈答詩と古代日本文学との比較

を通して 日本中国学会報 六九集 十月

学界展望・文学・三、隋・唐・五代／八、書誌学

日本中国学会報 六九集 十月

Differences between Old Manuscripts and Printed Edi-

tions of the *Han-shu*: With a Focus on the Text of
Tun-huang Manuscript and Editorial Glosses in a
Southern Sung Edition.

国際東方学者会議紀要 六二冊 十二月

京都大学人文科学研究所の前身と中国典籍日本古写本―写本

の複製を中心に(ダイジェスト版)

中国典籍日本古写本の研究ニューズレター 四 一月

京都大学人文科学研究所の前身と中国典籍日本古写本―写本

の複製を中心に 敦煌写本研究年報 十二号 三月

藤 井 律 之

出来の悪い正史―『晋書』 所報人文 六四号 六月

『晋書』 卷八十一残卷の綴合箇所

中国典籍日本古写本の研究 Newsletter No.4 一月

前秦政権における「民族」と軍事 宮宅潔編『多民族社会の

軍事統治 出土史料が語る中国古代』 京都大学学術出版会

三月

藤 井 正 人

「文獻屋」のフィールドワーク 人文 六四号 六月

インド・アリア人の移住とその変化 インド文化事典編集

委員会編『インド文化事典』 丸善出版 一月

藤 原 辰 史

書評 李海訓『中国東北における稲作農業の展開過程』

歴史と経済 二三五号 四月

憲法前文の勢いについて 岩波書店編集部編『私にとつての

憲法』

屑拾いのマリア(4)

現代思想 四五卷八号 五月

ばくたちの子育て時評

クーヨン 二二卷五号 五月

種を守る NPO法人市民環境研究所『市民研ニュース』二

五号

六月

生活に追われる人びとの政治

北海道新聞(朝刊) 六月

戦争 伊地知智子、新ヶ江章友編『本当は怖い自民党改憲草

案』 法律文化社

七月

書評 アナスタシア・マークス・デ・サルセド『戦争がつく

った現代の食卓』

東京新聞 八月二十日

横井時敬の農学 金森修編『明治・大正期の科学思想史』

勁草書房

八月

三つの金の鍵 「この絵本が好き!」編集部『どんな絵本を

読んできた?』 平凡社

八月

食べる場所のかたち(第一話)

みんなのミシマガジン(夏号) 八月

早乙女勝元さんと合唱団 北海道新聞(朝刊) 九月九日

●トラクターの世界史―人類の歴史を変えた「鉄の馬」 中公

新書

九月

食べる場所のかたち(第二話)

みんなのミシマガジン(秋号) 九月

食とは何かについて考える本棚 kuroba 二九号 九月

墨色と泥色の記憶―かこことしの絵の淡い濁りについて

現代思想 四五卷一七号 九月

ばくたちの子育て時評

クーヨン 二二卷九号 九月

対談 食と性をめぐる思考の冒険(赤坂憲雄×藤原辰史)

図書 八二五号 九月

●戦争と農業 集英社インターナショナル新書

十月

人間チューブ論―食のダイナミズムを考える

美術手帖 一〇六〇号 十月

ポスト・フード

現代詩手帖 六〇巻一〇号 十月

縁食論(2)―弁当と給食の弁証法

ちゃぶ台 三号 十一月

種子の文明的意味

季刊地域 十一月

生態学の「分解者」概念について(1)

現代思想 四五卷二〇号 十一月

インタビュ― 技術発展 負の側面に目を

中国新聞(朝刊) 一二月一八日

インタビュ― あの人に迫る 中日新聞 一二月二二日

二〇一七年下半年読書アンケート 図書新聞 一二月二三日

生態学の「分解者」概念について(2)

現代思想 四五卷二二号 十二月

書評 ジョルダン・サンド著/天内大樹『帝国日本の生活空

間』

歴史学研究 九六五号 十二月

人文学 スープとしての役割

朝日新聞(夕刊) 一月三十一日

核エネルギーを拒否する思想と日常の言葉―猪瀬浩平『むら

と原発』を読む

季論二二 三九号 一月

ばくたちの子育て時評

クーヨン 二三卷一号 一月

サーピス過剰社会

北海道新聞(朝刊) 二月三日号

私のオビニオン

月刊J A 七五六号 二月

農業技術への問い―ハイデガーの概念「育む *hegen*」について
現代思想 四六卷三号 二月

『証言 水俣病』(入学したら読んでほしい一冊)

京都大学新聞 三月十六日号

品種改良―近代の稲を中心に―

歴史と地理 七一二号 三月

船山 徹

仏教の伝来と中国での展開 中国文化事典 丸善出版 四月

著書を語る『東アジアの生活規則「梵網経」』

仏教タイムス 五月十八日号

私の三冊 図書(岩波文庫創刊90年記念) 八二〇 七月

Two Sides of Chinese Translations of Buddhist Texts:
What Comes to Light beneath the Surface. *Translations of the International Conference of Eastern Studies*

62 十二月

梁の宝唱『比丘尼伝』の定型表現―撰者問題解決のために

東方學 一三五 一月

Coping with Too Many Variants: A New Type of Edition
of the Scripture of the Pure Divinities' Netted [Banners]
(*Fanwang jing*), *International Journal of Buddhist Thought & Culture* 27/2 一月

真如の諸解釈―梵語 *tathā* と漢語「本無」「如」「一如」「真如」
如」 東方學報 京都九二冊 三月

ホルカ イリナ

欧米における私小説研究 大浦康介編『日本の文学理論 ア
ンソロジー』 水声社 六月

自然主義と写実性―日本近代文学の観点から リアリズム文
学研究会編『公開研究会報告書』 19世紀文学とリアリズム

ム―共時的文学現象に関する文化横断的研究』 リアリズ
ム文学研究会 三月

● *Proceedings of the Second Annual "Japan in the World,
the World in Japan" Conference* (共編著) 大手前大学国
際教育インスティテュート 三月

● 島崎藤村 ひらかれるテキスト―メディア・他者・ジェンダ
ー 勉誠出版 三月

宮 紀子

和算の源流をもとめて―「モンゴル時代」の贈り物
科学 八七一〇 十月

● モンゴル時代の「知」の東西(上)(下) 名古屋大学出版会

モンゴル時代の「書物の道」 京都大学人文科学研究所附属
東アジア人文情報学研究中心編『京大人文研漢籍セミ
ナー7 漢籍の遙かな旅路―出版・流通・収蔵の諸相』 研
文出版 三月

宮宅 潔

盗掘簡を読む

人文 六四号 六月

岳麓書院所藏簡「亡律」解題

東方学報 九二冊 十二月

岳麓書院所藏簡《秦律令(壹)》詁注稿(一)(共著)

東方学報 九二冊 十二月

關於里耶秦簡⑧755・759簡與⑧1564簡的編聯

簡帛網 三月四日

●多民族社会の軍事統治 出土史料が語る中国古代 科研費成果報告書

果報告書 三月

征服から占領統治へ——里耶秦簡に見える穀物支給と駐屯軍——

科研費成果報告書『多民族社会の軍事統治 出土史料が語る中国古代』 三月

向井 佑介

雲岡石窟の仏塔意匠 京都大学人文科学研究所・中国社会科学院考古研究所編『雲岡石窟』一九卷本文 科学出版社東京

京 八月

翻訳 李裕群「平城から洛陽へ——古代交通路上の北魏石窟」

京都大学人文科学研究所・中国社会科学院考古研究所編『雲岡石窟』一八卷本文 科学出版社東京

書評 佐川英治『中国古代都城の設計と思想——円丘祭祀の歴史の展開』 日本秦漢史研究 一八号 十一月

日本考古学の百年と中国考古学研究——二〇世紀前半の調査資料にもとづく新たな研究視角

中国考古学 一七号 十二月

大宮神社所蔵の境内出土遺物 東昇・菱田哲郎編『舞鶴・京丹後地域の文化遺産』京都府立大学文学部歴史学科

三月

村上 衛

書評 古泉達矢『アヘンと香港 一八四五—一九四三』

史学雑誌 一二六編四号 四月

書評 彭浩『近世日清通商関係史』 社会経済史学 八三卷一号 五月

アヘン問題とモリソン 岡本隆司編『G・E・モリソンと近代東アジア——東洋学の形成と東洋文庫の蔵書』勉誠出版

福建 華僑華人の事典編集委員会編『華僑華人の事典』丸

善書房 清末中国における秩序再編とアウトロー集団 現代中国研究 四〇号 十一月

目黒 杏子

●中国の歴史・現在がわかる本 第二期① 紀元前から中国ができるまで かもがわ出版

秦代県下の「廟」——里耶秦簡と岳麓書院藏秦簡「秦律令」にみえる諸廟の考察—— 高村武幸編『周縁領域からみた秦漢帝国』六一書房

前漢前半期の酎祭 洛北史学 十九号 九月

書評 福島大我『秦漢時代における皇帝と社会』

守岡 知彦

CHISE の RDF 化の試み

情報研報 2017-CH-114 巻一 号 五月

前近代の漢字字形に対する字体の包摂モデルの適用に関する

諸問題

情報研報 2017-CH-115 巻四 号 七月

CHISE のデータ形式 (Ver. 0.1) CHISE 講習会講義資料
(北海道大学)

漢字部品記述における複数ドメイン導入の試み

じんもんこん 2017 論文集 十二月

古典中国語 Universal Dependencies への挑戦 (共著)

情報研報 2018-CH-116 巻二 〇 号 一月

古典中国語 (漢文)

情報処理学会論文誌 五九巻二 号 二月

項書き換え系を用いた漢字字体の包摂標準の形式化の試み

情報処理学会論文誌 五九巻二 号 二月

CHISE における漢字部品整理の現状と課題 東洋学へのコ
ンピュータ利用 第 29 回研究セミナー 三月

森川 裕貴

「五五憲草」解釈から見る五権憲法―雷震と薩孟武の所論を
めぐって 日本孫文研究会編『孫文とアジア太平洋―ネイ
ションを越えて』 十一月

Le comparatisme et la leçon de Hisayasu Nakagawa. *Zin-
bun* 48. 三月

矢木 毅

漢籍購入の旅―朝鮮後期知識人たちの中国旅行記をひもとく

京都大学人文科学研究所附属東アジア人情報学研究セン
ター編『漢籍の遙かな旅路―出版・流通・収蔵の諸相』京

大人文研漢籍セミナー 7 研文出版 三月

安岡 孝一

人名用漢字の新字旧字:「罪」と「辜」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月六日

広告の中のタイプライター: Oliver No.9

三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月二三日

人名用漢字の新字旧字:「戸」と「戶」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月二〇日

広告の中のタイプライター: Rex Visible Typewriter No.4

三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月二七日

人名用漢字の新字旧字:「場」と「場」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月一日

広告の中のタイプライター: Underwood Standard Type-
writer No.5 三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月一八日

人名用漢字の新字旧字:「双」と「雙」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月二五日

常用漢字は日々変化している

情報管理 第六〇巻第三号 六月一日

広告の中のタイプライター：Royal Signet 六月一日

三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月一日

人名用漢字の新字旧字：「麵」と「麴」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月八日

広告の中のタイプライター：Corona 3

三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月一日

人名用漢字の新字旧字：「恚」と「恚」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月二二日

24 広告の中のタイプライター：Fox Visible Typewriter No.

三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月二九日

人名用漢字の新字旧字：「龜」と「龜」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月六日

広告の中のタイプライター：Sholes & Glidden Type-Writer

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月一三日

人名用漢字の新字旧字：「臙」と「臙」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月二〇日

広告の中のタイプライター：Crandall New Model

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月二七日

人名用漢字の新字旧字：「蟬」と「蟬」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月三日

Unicode 10.0 に見る日本の国字

情報処理学会研究報告 Vol.2017-CH-115 No.5 八月四日

広告の中のタイプライター：Caligraph No.2

三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月一〇日

人名用漢字の新字旧字：「俠」と「俠」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月二四日

広告の中のタイプライター：Blickensderfer Electric

三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月三一日

人名用漢字の新字旧字：「挟」と「挟」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月七日

広告の中のタイプライター：Remington Type-Writer No.2

三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月一四日

人名用漢字の新字旧字：「毘」と「毗」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月二一日

25 広告の中のタイプライター：Densmore Typewriter No.2

三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月二八日

人名用漢字の新字旧字：「和」と「味」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月五日

広告の中のタイプライター：Daugherty Typewriter

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月二二日

人名用漢字の新字旧字：「京」と「京」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月一九日

広告の中のタイプライター：Wellington No.2

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月二六日

人名用漢字の新字旧字：「褐」と「褐」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月二日

広告の中のタイプライター：Smith-Corona Coronet

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月九日

人名用漢字の新字旧字：「温」と「溫」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月一六日

広告の中のタイプライター：Munson No.1

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月二三日

人名用漢字の新字旧字：「予」と「豫」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月三〇日

広告の中のタイプライター：Monarch No.2

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月七日

人名用漢字の新字旧字：「声」と「聲」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月一四日

広告の中のタイプライター：Bar-Lock No.2

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月二二日

人名用漢字の新字旧字：「験」と「驗」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月二八日

広告の中のタイプライター：Smith Premier No.1

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月四日

人名用漢字の新字旧字：「莖」と「莖」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月一日

広告の中のタイプライター：Ideal Schreibmaschine

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月一八日

人名用漢字の新字旧字：「阴」と「陰」と「陰」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月二五日

古典中国語 Universal Dependencies への挑戦

情報処理学会研究報告 Vol.2018-CH-116 No.20

一月二八日

広告の中のタイプライター：Rem-Sho Typewriter No.2

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月一日

人名用漢字の新字旧字：「鷺」と「鷺」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月八日

古典中国語（漢文）の形態素解析と Universal Dependencies

「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」プロジェクト公開研究会 二月九日

古典中国語（漢文）の形態素解析とその応用

情報処理学会論文誌 第五九巻第二号 二月一五日

広告の中のタイプライター：Underwood Golden Touch Electric

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月一五日

東アジア人文情報学研究所の現在—漢字処理から漢文処理へ—

KUORCAS キックオフ・シンポジウム「デジタルアーカイブが開く東アジア文化研究の新しい地平」 二月一八日

人名用漢字の新字旧字：「集」と「集」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月二二日

広告の中のタイプライター：New Yost

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月一日

人名用漢字の新字旧字：「甜」と「甜」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月八日

ISO/IEC 10646: 2017 になつた日本の漢和辞典の漢字 東洋学

へのコンピュータ利用 第二九回研究セミナー 三月九日

広告の中のタイプライター：Royal Futura 800

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月一五日

人名用漢字の新字旧字：「麦」と「麥」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月二二日
広告の中のタイプライター：Harford Typewriter
三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月二九日

人

文

第六五号

二〇一八年六月三十日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品